
永久の契約

由乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の契約

【Nコード】

N13380

【作者名】

由乃

【あらすじ】

中学を卒業したばかりの神無。他の人とちょっと違った能力を持っている以外はいたって普通の女の子だった。ある日異世界に連れていかれるまでは

1 わたし

「 ちゃん、神無ちゃん」

誰かがわたしを呼んでる

「 起きて、起きてよお」

起きないし。

うるさいなあもう

声の主は芝生の絨毯に寝転んでるわたしをゆさゆさと揺する。

ちよつと揺すられただけで昼寝から覚めてあげるわたしではない。

3月。

だいぶ暖かくなってきたけど、セーラー服にセーターを羽織っただけの格好じゃ外で寝るのには寒いみたい。

「こんなところで寝てちゃ風邪引いちゃうよお、起きて神無ちゃん

」

語尾をのばすこの話し方は由利恵だ。

「起きてつてばあ 卒業式で疲れたかもしれないけどお 今週は
ママの手伝いしなきゃなのにい」

ぷっ、泣きそうな声、かわいい。

わたしが無視して寝たふりを続けると、由利恵は本気で泣きそうな声で必死に起こしにかかってくる。

由利恵はわたしより1つ年上の、ホームでのお姉ちゃん。

ホームにいる期間としてはわたしの方が長いけど、ここは年功序列制度だから由利恵のほうが偉い立場にいる。

偉いって言い方は変かな。

だから1つしか歳が違わなくても由利恵はわたしの面倒を見なくちゃいけない。

このホームはなんらかの理由で子供を育てられない親が、子供を一定期間預けられる施設になっている。

由利恵は5年前に来た。

本人が言い出さないならこっちは聞けないけど。両親の離婚が原因だそうだけど、ただ単純な離婚、それだけじゃない理由があるんだろうとわたしは予測してる。

時々見せる、由利恵の曇った瞳の先には壮年期くらいの男がいるから、きつとそうゆうことなんだと思う。

父親の家庭内暴力が、ひどい浮気か。

失礼かも知れないけど、少しだけ由利恵に同情した。

それに比べてわたしはトラウマとかはないからある意味マシなんだろうと思う。

何て言っただってわたしは物心がついた頃にはすでにホームにいたんだもん。

正確に言つと、6歳くらいまでの記憶が全くない。

ホームのママから聞いたところによると、文字のまんま、そこから入んの道に行き倒れていたらしい。

拾ってくれたのがママで、身元不明・年齢不詳なわたしに“神無”と名付けてくれた。

わたしを拾ったのが10月だから、そこからきた名前らしい。

このホームの名前が三日月荘だから、その名前を借りて“三日月神無”と名乗ってるのがわたし。

いろんな理由があつて、元々の苗字を出せないホームの子も、姓を三日月にして生活している。

契約期間を過ぎても親が迎えに来ない場合、高校卒業まではホームで面倒を見てくれて、大学生かそれと同等の年齢になると独り立ちするように決まっていた。

わたしは中学を卒業したわけだけど高校に進学する気もなかった。

だからこれから3年間アルバイトして独り立ちできるようにお金を貯めるつもりなんだ。

ママは交友関係が広いから、そういった繋がりでわたしのアルバイト先も見つけてくれたのだから助かった。

今時中卒でアルバイト雇ってくれるところは多くはないから正直あたしだって不安だったもん。

そんなこんなでわたしはわたしの人生に満足してる。

身体はなんの不自由もないしね。

思い出せない過去も、無理に思い出すつもりもない。

忘れていたほうが良い事、だってあると思う。

そんなどこにでもいるようなわたしという小娘だけど、他のみんなと決定的に違うことが1つだけある。

それはわたしが動物や植物の声が聞こえるということ

こうやって静かに目をつむって風を感じてると、囁くような、小さな小さな声が聞こえてくる。

わたしはみんなの囁きを聴くのが楽しみなんだ。

純粹に生きることを喜びと感じてる彼等が愛おしい。

それが動物になると、人間に対する文句を言う賢いヤツもいるから飽きることなんてない。

動物、特に犬や猫の傍でじっと聞き耳を立ててるわたしの姿が他人にどう映ってるかなんて、中学に上がるまで考えられなくて。

わたしはただ近所の奥さん方がする世間話を聞いている程度にしか思っただけ。

はたから見れば動物の近くでしゃがみ込んで、目をキラキラさせてる変な子、という目で見られてみたい。

友達と遊ぶより生き物たちの声を聞いている方が楽しかったから、人間付き合いは悪くなる一方で。

いつの間にかわたしは不思議ちゃんのリッターが貼られてたし、友達と言える子もいなくなってた。

イジメられはしなかったけど避けられてたのは知ってたから、自分から仲間に加わろうなんて無駄な努力はしなかった。

不思議で、奇妙な能力を持ってるわたしが残念に思うのは、彼等の声はわたしに届くのになんて無駄な努力はしなかったこと。

唯一会話できる動物はわたしが拾った一匹の猫だけで

「んぶっ!?!」

「こらっ!?!起きなさい神無っ。今週は家事当番でしょうが!?!」

「うわ べちゃべちゃ」

なかなか起きないわたしに痺れを切らせた由利恵はママを呼んできたらしい。

く、卑怯な

気の強いわたしがこのホームで勝てないのはママだけなんだ。

顔の上に落とされた濡れたタオルを剥がすと、視界には由利恵の近すぎる顔が入ってきた。

「うわわっ 由利恵、近い近い！」

「だってえ。神無ちゃん起きないからお目覚めのチューしちゃうかなって思ってたえー」

「さっきまで泣きそうな声で起こそうとしてたくせにっ！」そう言っただけで傷つけないように気をつけて由利恵の頬つぺたをにぎいと摘むと、由利恵はへらっとなんか笑って言った。

「もう、時間過ぎちゃったからまあいつかあーって思って」

「いや、ダメでしょ」

「ええダメよ。これから手伝ってちょうだい！20人分作るのは大変なんだからっ。2人とも30分の遅刻よ、時間厳守は決まりなんだから罰則よ」

ほわほわした由利恵の意見にビシッとつっこむママの意見には賛成。

ママを入れてホームには20人の女子がいるわけだから1人で料理

をするのは大変だもんね。

でも罰則はめんどくさい。

よっこいしょと腹筋で起き上がるわたしの動作と一緒に身体を起こした由利恵は、むーっと唇を尖らせた。

「さっきまで全然起きなかったのにい神無はママの言うことはしっかり聞くんだよねえ　しかも罰則なっちゃったよう」

由利恵がわたしをジト目で見る。

若干むくれてしまった由利恵は結構イジケやすいタイプだから早めに機嫌をとったほうが良いかもしれない。

「すごく眠かったの。ごめんね、起きれなかった」

わたしは座ったままの体勢で由利恵を見た。

この位置ならちょうどよく由利恵を上目遣いに見れるのだ。

つまり計算したぶりっ子で平謝りしてるわけで。

自分的には気持ち悪いんだけど由利恵やママには効果抜群な技なんだ。

自分で言うとは惨めになるけど、わたしの容姿はすごく幼く見えるらしくて、なんでも庇護欲とやらを誘うような姿をしてるらしい。

目はおっきいし、やたらと睫毛は長いし。

そのくせ鼻が高いとは言えないからもう童顔一直線。

まあ中身は少々オヤジ化した生意気な娘なんだけど。

「許して。由利恵、ママも、ごめんなさい」

「え、ううん！！卒業式疲れたもんねえ、いいんだよお眠かったよねえ」

はうっと言って由利恵はわたしの頭をなでなでして顔を赤らめてる。

「そ、そうね？まあまあ仕方ないわ。ささ、2人とも中に入って？今日は神無が疲れてたつてことで罰則は無しにするわ」

手に持った濡れたタオルを無駄にパタパタさせたママの、お許しをいただいた瞬間内心ガッツポーズをきめてるわたしに2人は気づいてないだろう。

哀れな。

「うんっ！ありがとうママ、由利恵っ」

ぱっと立ち上がって勝利の笑みを浮かべたわたしの右手には、ママの柔らかい手が。

左手にはわたしの手より第一関節分大きな由利恵の手が繋がれた。

「早く戻ろっ！みんなのために夕食作らなきゃっ」

「もっつ、神無は調子いいんだから！」

「本当だよお でも神無の“ごめんね”はかわいすぎるう。萌え萌えだよお」

呆れたように笑う優しいママと、ちょっと思考が脱線ぎみだけど良い子な由利恵と。

ホームで生活する心に影をもった仲間と、我が儘なわたし。

いつの間にか傍にいた黄金色の毛をもつ不思議な猫はわたしの脚に擦り寄ってくる。

みんなが傍にいるこんな毎日がわたしにとって幸せですべてなんだ。

『今日はビーフシチューみたいだね』

リリンと涼しげな鈴の音と共に聞こえてきたのはこれまた可愛らしい高音域の声で。

これはわたしが唯一話せる猫のルールシエル。

ルールシエルという名前はルールシエル本人から聞いたのであってわたしが付けた名前じゃない。

長いからルーとかルルっていつもは呼んでいる。

ルールシエルはどこか金持ちのお宅の飼い猫だったんじゃないかとわたしは思ってる。

金色の毛並みは完璧に整ってるし、アメジストの瞳もすごくキレイで神秘的。

猫にしては大きいから外来種でしかも血統書付きの高級な御猫様なのかもしれない。

話す内容だって人間と同じだし、なんだか行動動作一つ一つに気品を感じさせられるの。

もちろんというか、食べ物もわたしたちといっしょ。

「やった！今日ビーフシチューなんだっ」

「あら、よくわかったわね」

まだ言ってなかったのに、と驚いたように言うママにわたしはルーシエルを指差して言った。

「ルーがビーフシチューだって教えてくれたんだ」

「ああ、ルーは鼻が良いもんね」

「鼻が良いって便利だねえ」

この2人はわたしが動物や植物の声が聞こえることを信じてくれて、理解もしてくれてる。

受け入れてくれる人はなかなかいないだろうから、わたしの秘密を知ってもなお優しくしてくれる2人に出会えたことに感謝だ。

「ルル、今日は早く帰ってきたんだね？」

そう問うとルールシエルは大きなアメジストの瞳をわたしに向けた。

『 ああ、ちよつと嫌な気配を感じたからね。早めに帰ってきたんだ。カンナと一緒にゆっくり食事を摂れると思つと僕としては嬉しいよ。久しぶりに一緒に寝れるしね』

ルールシエルは可愛い声に似つかわず大人っぽい口調で話す。

時々甘い言葉すらかけてくるものだから驚きだ。

こんな調子でルールシエルとも一年半の付き合いになるのだ。

「ねえねえ、ルーは何て言ってるのぉー？」

「えつと、 みんなと一緒にご飯食べるの楽しみだつて」

そのままを伝えたらちよつとばかり問題だから、自分なりに要約してみる。

「ふうん みんなと、ねえ」

『 みんなと、などとは言っていないけどな。君なんかとは特に』

「こら、ルル。そういうこと言わないの」

わたしは由利恵の疑わしげな視線を軽く流したルールシエルの投げやりな言い方を嗜めた。

なぜか由利恵とルルは相性が良くないみたい。

由利恵にいたってはルルの声が聞こえないはずなのに。

「どうせ神無ちゃんとかご飯食べたいとか一緒に寝たいとか言ってるんでしょお？猫のくせにやらしい」

当たらずしも遠からず。

「あははっ！由利恵にとつたらルルが1番のライバルね」

なんでママは由利恵を煽る！

「そつだよおママ。神無ちゃんがルーに取られちゃっつ」

「そつよ、猫とはいってもルーはオスだからね。神無を狙ってるかもっ」

「ルーなんか神無ちゃん渡さないもんっ！」

『なに言ってるの。もともとカンナは僕のためだから』

当の本人を蚊帳の外に置いた3人の、テンポ良い会話を聞きながらわたしはやれやれと首を振るのだった。

2 | ささやかな幸せを

わたしたちは早速夕食の支度を始めた。

由利恵とママが食器を用意する間にわたしはビーフシチューを作る。

ママは器用だけどなぜか料理だけは劇的に下手なんだ。

だからいつも簡単な下ごしらえだけ頼んで、それ意外は当番の子が作る。

由利恵はもともと料理が上手いから、当番が回ってきたときはわたしが練習もかねて調理をすることになってる。

「できたよー、由利恵。味見してみて？」

わたしが小さな器にとったビーフシチューをテーブルの上に置くと、由利恵が来るより早くルールシエルがすたつとテーブルに乗った。

「ルール？」

「あーっ！なんでルールが先なのお？！」

ルールは小さな舌でペロツとシチューを舐めると、ふむ、と頷きわたしを見る。

『美味しい。ちょうど良い味付けだよ』

「こらーっ！神無ちゃんはわたしに味見頼んだだよー！なんでル

「味が味見してんの！」

『君が味見しなくてはならない理由なんてないだろ』

テーブルを拭いてたタオルを使って、ルールシエルをしっしと追い払うと由利恵はぷーっと頬を膨らませた。

「ルー生意気い！！言葉はわからなくなっちゃってなんとなく言ってることわかるんだからねっ！神無ちゃんの料理の味見はわたしの仕事なの」

由利恵にルールシエルの言葉は解らないはずだから。

普通の猫みたいに“にゃーん”て鳴いてるようにしか聞こえてないだろうに。

なんとなくわかつちやうなんて、逆に仲良いからなんじゃないかと思うのはわたしだけかな。

『カナナと同性の君が僕に嫉妬するなんて、実に愉快だよ』

ルールシエルはそう言って、すたんとテーブルから飛び降りた。

わたしは新しい器にシチューをとってルールシエルに敵意むきだしな由利恵がしゃべりだす前にずいっと渡した。

「はい、由利恵！味見よろしく」

「む はーい。うんっ美味しいよお。だいぶ料理うまくなってきたね神無ちゃん」

由利恵はにつこりと満足そうに笑うと、床から自分を見上げてるルールシエルを見下ろした。

わたしは2人の間に見えない火花が散ってるように思えた。

なんでこんなに2人は敵視しあってるんだろうか。

ルールシエルはいつも昼間から夜にかけて外に出てるから家にはいないけど、時々こうして早く帰ってくると飽きもせず由利恵と揉めている。

「「ご飯できたー??」」

お腹をすかせたみんながキッチンに入ってくると、由利恵とルールシエルの冷戦は終わりを告げた。

2人を呆れ半分で見てたわたしも最後の仕上げにかかった。

「それでは、いただきまーす」

ママの声がかかってわたしたちの夕食は始まる。

食事はみんなで摂るのが決まりみたいになって、何個かのテーブルに別れて食べる。

ルールシエルは基本的に直接食器に口を付けて食べたりしない。

だからわたしが食べさせてあげてる。

わたしの膝に行儀良く座ってるルールシエルの口元に、小さく切ったビーフを持って行くと、これまたパクっとうまく食べるのだ。

好き嫌い無しに食べるルールシエルだけど、こんなにいるんなモノを食べて平気なのかと時々心配になる。

『美味しいね。味も良いけど、やっぱりカナナが食べさせてくれると美味しさが増すよ』

「ルルって大袈裟」

わたしがクスッと笑うと、向かい側に座ってサラダを頬張ってた由利恵が面白くなさそうに言った。

「なにい？神無ちゃんから食べさせてもらつと余計美味しい、とか言ってるわけえ？」

あはは 近い。

『この女子には僕の声が聞こえてるのかな？』

「や、聞こえてないでしょ？」

『 思考を読まれてると思うと悲しくなるな。あ、カナナ』

「うん？ちよっ ん」

わたしを見上げて話してたルールシエルがいきなり唇付近を舐めてきてびっくりした。

「！！なにやってんのおお！？」

由利恵がガタンと立ち上がったのと同時にルールシエルは涼しい顔をしてぴよんつとわたしの膝から飛び降りた。

『ごちそうさま。カンナの口元に付いたシチューは格別に美味だったよ』

「もう、ルル！」

「逃げるなあルーっ！！」

流石に声を上げたわたしと、半分叫び気味の由利恵に背を向けたルールシエルは、長く綺麗な尻尾をふるんと一振りして部屋をでて行った。

「もう！あれは本当に猫お؟؟絶対わかってやってるよねえ?!わたしの神無ちゃんにキスしたあ！許せないっ」

「キスつて言っても口の端だけどね？」

「あははっ神無のファーストキスはルーになりそうね？」

「猫に神無ちゃんのファーストキス取られるなんてやだよお?!」

「まあまあ、由利姉落ち着いて？」

「相手は猫なんだからさ」

「あっはははっ！」

ママの爆笑と、由利恵を宥める姉妹たちの笑い声につられてわたしも声を立てて笑った。

わたしはみんなが笑ってられる空間を、幸せ、だと思った。

3 | 大切な何か

「ふぁーっ」

今日で着るのは最後になる制服のセーラー服を脱いで、大人が3人一気に入っても狭くないだろう広い浴槽に浸かったわたしは大きく息を吐き出した。

浴槽の縁に両腕を組み、その上に顎を乗せるこの体勢が1番楽。視界にはわたしと同じく日焼けしてない由利恵の背中が映った。

タオルを使ってゴシゴシ擦る由利恵を見ると、その肌がちよつと可哀相に感じちゃう。

由利恵はザバザバと豪快にお湯をかけて泡を流すと、黒く長い髪を一つに束ねてわたしの隣に身体を沈めた。

「ふーっ。極楽だぁー」

「そうだねー」

由利恵はわたしと同じように浴槽の縁もたれかかると、こつちを見てふやあと笑う。

「当番の日は大変だけどゆっくりお風呂入れるから良いよねえ」

「完全に貸し切りだしね」

「ねー。そつだ、今日で神無ちゃんも中学卒業だねえ。本当に高校は行かなくてよかったのお？」

「うん、わたしなりたいモノとかないし」

最後のお湯は温めで長湯してもものぼせないから、由利恵とわたしはこうして風呂で長話をしたりするんだ。

由利恵の高校の話を聞いたり、今好きだというアイドルの話を聞いたり。

わたしは今日まで通ってた中学の話をした。

他愛のない世間話だけど、由利恵と話すのは楽しい。

いちいち反応が面白いんだもん。

「ええ???じゃあ学年で1番人気な男子に告られたのお??」

「まあ。でも友達情報だから1番かどうかはわからないけど」

「わたしの神無ちゃんに手え出したな　ま、相手にされないだろうけど。中学男子なんて」

「あははっ由利恵、キャラ変わってるよ?それに手出されてないから」

いつもの間延びした話し方の由利恵と、今の由利恵、どちらが素なのかわからないから面白い。

「わたしがこんな性格だって知らなくて告ってるみたいだから断ったよ」

つつい話しが弾み1時間はお湯に浸かってたわたし達は流石に熱くなつて、浴槽の縁に腰掛けて熱を冷ました。

「いるよねえーそうゆう人。勝手に理想像と重ねてくる人って嫌」

思い当たる節があるのか、由利恵は眉をしかめて腕を組んだ。

もにと豊かな胸が盛り上がる。

本人は気にしてないだろうけど、わたしは由利恵の腕に圧迫されて形を変えた大きい胸をチラリと見て一人落ち込んだ。

由利恵はグラビアアイドル並にスタイルが良い。

もう成長が止まったようで、完全に成熟した女の人の体型をしてる。

それに比べてわたしといえば。

1歳くらいしか歳が違わないのに胸なんか由利恵の半分もないのだ。

ビキニなんか着たら悲惨な結果になるに違いない。

わたしみたいな幼児体型にはスクール水着がお似合いだ。

童顔に幼児体型なわたしはせめて髪型だけは大人っぽくしようと思つて前髪を伸ばしてるけど 効果はあるのかわからない。

今時の中学生はみんな発育が良いから、自分だけ取り残されてるみたいで正直虚しい。

悲しいかぎりだ。

そんなことを考えてたら、知らないうちに由利恵の身体凝視してしまっていたようで。

由利恵と目が合ったわたしは無性に恥ずかしくなってふいつと視線を反らせた。

わたしの視線に気づいてた由利恵は、自分の胸とわたしの胸を見比べて納得したように頷く。

「神無ちゃん、大丈夫。きっと大きくなるよお それに神無ちゃんはそのままで十分可愛いから平気！胸なんて脂肪だよ」

「　　ありがとう？」

由利恵の絶妙なフォローに対してお礼を言ったものの、わたしはガクッとうなだれた。

制服を着てないと小学生としてもイケちゃいそうなのだが、由利恵みたいなセクシー体型になれる日はくるのだろうか。

第二次性徴は確かにきたはずなのに　　。

「あんまり気にすることないってえ。神無ちゃんは神無ちゃんなんだからあ。ね？」

そろそろ上がるおと言ってわたしの頭を撫でる由利恵はいつも通り、ふにゃーっと笑ってた。

由利恵の脳天気そうな笑顔を見ると細かいことで はないけど、悩んでることがバカバカしく思えてくるのだから不思議。

「ん、上がるっか」

「今日もいっぱい話したねえ」

「半身浴って身体に良いって言うから、ちょうどよかったね」

わたしと由利恵がお風呂から上がり、また他愛ないおしゃべりをしながら着替えを終え、掃除を済ませるともう時計の短い針は12を回っていた。

みんなが使ったお湯を流し、お風呂場と脱衣所の掃除はなかなかの労働なんだ。

由利恵はちゃちゃっと自分の仕度を済ませてわたしを呼んだ。

「神無ちゃん、こっちきて座ってえ。髪の毛乾かしてあげるっ」

「ありがとうっ」

由利恵と一緒にお風呂に入ると、必ずと言って良いほどわたしの髪まで乾かしてくれる。

すごく気持ち良いから、つついっつとりリラックスしちゃうんだ。

優しく髪を梳く由利恵の指を心地好く感じていたわたしが、ふとつむっていた目を開くと大きな鏡ごしに由利恵と目が合った。

「？」

由利恵の瞳はなにか言いたそうに揺れているからわたしは首を傾げて見せる。

「由利恵？」

首を傾げるわたしを由利恵は目を細めて見つめてるだけでなにも言わない。

その間にも由利恵の手は動いていて、わたしの量の多い髪は大分乾いてきた。

しばらくわたしと由利恵はそのまま見つめ合ってたけど、由利恵がふっと表情を緩めたことで微妙な雰囲気は壊された。

由利恵は時々こうやって無言で視線を合わせてくるんだけど、わたしはその意味がよくわからないから反応しようがないんだ。

「由利恵？」

「はぁい終わったよーっ！神無ちゃんの髪の毛はたつぷりしてて柔らかいよねえ」

「量が多いと夏暑いし大変だよ。由利恵みたいにストレートならいいんだけど」

由利恵を伺うように声をかけてみるけどやんわりかわされちゃうし、由利恵がなにか言うまで待つことにした。

由利恵はわたしのくせつ毛を気に入ってるみたいで、いつもドライヤーをかけ終わると指にクルクル巻き付けて遊ぶ。

「えーっ。いいじゃんー！神無ちゃんもともと髪の色素薄くて茶色っぽいしいクルっしてるとふわふわでお姫様みたいだよお？」

お姫様って と苦笑いなわたしをニコニコと見やる由利恵。

わたし姫ってキャラじゃないし

「あ、そろそろ寝なくちゃね。早く部屋戻る」

「明日から春休みだからねえ。ついついゆっくりしちゃうたあー」

「ほんと。ママに見つかったら怒られちゃいそう」

「せつかく罰則なくなっただから叱られたくないねえ。静かに戻るお」

いつものようなやり取りをして、私たちがお互いの寝室に帰った頃にはもう他のみんなは寝静まってて、ホームはしんとしていた。

ここでは1人1人小さいけど個室があてがわれている。

シングルベッドと勉強机、洋服ダンスが1つ、と必要最低限の家具しかない部屋だけどプライベートな空間があるのはすごくありがた

い。

足りないものは自分のお小遣で買い足したりする。

わたしの部屋の机には、もう勉強道具は置いてないから空いたスペースに植物を置いていた。

小さなサボテンとサンセベリアがわたしの癒し。

窓際には大きめなバスケットがあつて、その中にはフワフワなクッションが入れてある。

それはルールシエルが寝るためのもの。

夜中に帰ってくる人が多いルールシエルは、わたしに気を使って起こさないようにそのバスケットの中で寝てるんだ。

布団に入ってきたところでわたしは起きないだろうけど、そういうさりげない気配りが出来るところはすごく紳士的だと思う。

私が部屋に入ると、ほんわりと室内が温めてあつた。

ルールシエルが暖房を点けておいてくれたみたいだ。

「ルル、部屋あつためてくれてたんだ」

ベッドの上で寝転んでるルールシエルは顔だけ起こしてこちらを見た。

『遅かったね、カンナ。ずいぶん長湯してたみたいだけど 湯冷めしないように、早く中に入りなよ』

そう言うとルールシエルは起き上がって器用にかげ布団を捲った。

彼はわたしより確実に頭は良いし、気が利くと思う。

宿題で出た数学を教えたら、3日で法則を理解して逆にわたしが教わる立場に変わったくらいだし、電化製品の使い方もすぐに覚えた。

猫のくせについて甘くみると痛い目にあう。

「ありがとう。ルルは良い旦那になるよ」

『ふふ。うれしい褒め言葉だね。ぜひカンナの夫にしてくれる？』

ルールシエルはコロコロと可愛い声で笑い、ベッドに潜り込んだわたしを見下ろした。

「そうだねー。ルルが猫じゃなくて普通の人なら結婚したいかも。

あ、わたしが16になったらね？」

わたしが冗談混じりに答えるとルールシエルはずいっと顔を近づけてきた。

大きいアメジストの瞳にわたしが映ってる。

本物の宝石みたいに綺麗なルールシエルの瞳に見つめられるとなぜかドキドキするんだ。

猫相手になに考えてるんだか

『僕が 人間なら良いんだ？ そうしたら君は僕の妻になるんだね？
16になったら良いんだね？』

「へ？」

あまりにも近距離で話すものだから、ルールシエルのヒゲがちょんちょん顔に当たってくすぐりたい。

「ぶははっ！ ルルのヒゲくすぐりたいよっ！」

『質問に答えてくれたら離れるよ』

「いやーっ！そのまましゃべらないでっ」

『

仰向けになってるわたしに覆いかぶさるようにお腹の上に乗っかると、ルールシエルそのままザラザラな舌でわたしの首筋を舐めてきた。

「うひゃっあ！ やだやだ、くすぐりたい！ あははっ」

『カンナが真剣に聞いてくれない限り止めないよ』

ケラケラ笑うわたしに、ルールシエルは不機嫌そうに答えた。

そんな、猫の求婚じみた台詞に真剣に答える人なんていないから！

「もうっ えいっ！」

『わっ！！』

わたしはルールシエルを抱きしめると身体ごとゴロンと横向きになった。

猫と人とは根本的な力が違うから、いくらルールシエルが猫にしては大きめな身体をしたとしても簡単に退かすことができる。

そのまま胸に抱えこむように閉じ込めると、ルールシエルはむきゅーと可愛い声で鳴いた。

「捕まえたっ！可愛いルル。もう寝ましようねー」

『苦しい』

猫撫で声を出すわたしに向かって腕の中から苦情を言ってくるルールシエルだけど、本気で嫌がってるようではないから離してあげない。

ルールシエルの首辺りは毛がすごく柔らかくて気持ちいい。

ほんのり石鹸の香がする。

鼻を寄せてスリスリと顔を擦り付けるようにすると、首輪代わりに付けてるオシャレなチョーカーに当たって少し痛い。

『カンナ、僕にとってもそれはくすぐったい』

「さっきのお返しだよ。ルルはすごいふわふわだね。気持ちいいー
あー寝ちやいそう」

時間が遅いということもあって、だんだんと瞼が重たくなってきたわたしは、不満を漏らすルールシエルの声を子守唄にそのまま意識を夢に放った。

4 | 夢と現実の間

『カンナ、カンナ。ごめん もう時間がないんだ ごめんね』

夢うつつに聞こえてきたこの声はルールシエルの？

あったかい布団とルールシエルの柔らかい毛並みの誘惑に抵抗して目を開けようと思うけど、なかなか難しい。

無理、起きれない。

身体がひどく重い気がする。

そもそも今が現実なのか夢の世界なのか、判断できない。

『カンナ、ごめんね』

眠ってるわたしに何度も謝るルールシエル。

どうしたの？

そんなふうに謝られたら不安になるよ？

わたしは心配になって起きようと瞼に力を入れた。

が、うまく力が入らない。

え？

起き上がろうと腹筋に力を入れたけどそれもできない。

いつも何気なくやってる開眼という作業ができないとなるとわたしもだんだん焦りが生じてきた。

まるで金縛りにあつたかのようにわたしの全身は硬直してる。

恐怖という感情が湧かないのは、わたしの頬に擦り寄るルールシエルの存在があるからだろうか。

状況は良くわからないけどとりあえずルールシエルが傍にいるなら安心、と力を抜いたわたしの唇にチクリと痛みが走った。

「
」

ルールシエルの鋭い歯がわたしの唇を傷つけたみたい。

噛み付かれたことがないから驚いたけど、それ以上にびっくりしたのはルールシエルの舌。

ルールシエルの舌がわたしの血をペロペロと舐め、そのまま唇を割って口内に入り込んできた。

力が入らないわたしは、ルールシエルのされるがままになっている。

おい、ルルの変態っ

口に舌入れるのはさすがにやめてっ

わたしは心の中で精一杯ツッコミを入れるけど全く意味がない。

少しして好きなようにさせてたルールシエルの舌に違和感を覚えた。さっきまで小さいザラザラした舌がわたしの舌にチヨンチヨンと当たってただけなのに。

いつの間にかわたしの舌に擦り付けるように動いてるそれは明らかに人間のものになっていた。

ちょっと待って ！！

これは絶対おかしいよね？

まだまともにキスすらしたことないのに、とか他人の舌の違和感とかを感じてるうちに、ひしひしと危険感が募ってきたわたしは内心願った。

やめてっ早く、早くどっか行ってよ変態っ ！

なんでこんなことされてるのわたし！

夢?! 夢なら早く覚めて ！

ルルはどこ行った?!

鼻先に当たる自分以外の人の息遣いに恐怖を感じはじめたわたしの気持ちを通じたのか、密着してた唇が軽く音を立てて離れていった。

そっと息を吐く変態じみた人間らしきその人の唇が、柔らかくてちよっと気持ち良かったか思ってしまったわたしは末期かもしれない。

「神無。君はこれで僕のものだ」

誰？

澄んだソプラノボイスがわたしの耳元で吐息まじりに囁く。

少女か少年か、まだ区別がつかないその声は妙に艶っぽくて鳥肌が立った。

身体が鉛のように重たいのは心なしかさつきよりひどくなってて。

動かしたくてもピクリとも動かせないのは変わらない。

その人はわたしのぐったりとした身体を起こしてその胸に抱いた。

キスの次はハグか

ギュツとわたしの身体を抱きしめる腕は、見えないけどなんとなく華奢なイメージがわく。

その人の胸にわたしの耳がピッタリと触れてて、規則正しい鼓動がリズムを刻んで聞こえてきた。

人の温もりはきつと警戒心を和らげる作用があるんだと思う。

さつきまで感じてた不安とか恐怖心とかがすつきり消え去ってしまった。

眠りにつく前のまどろみにいるかのような感覚がわたしを包む。

夢であってほしいけど

これが夢ならわたしは欲求不満な変態かも

はっきりしてた意識まで危つくなってきたわたしが最後に聞いたのは。

「契約成立、だね」

満足げに呟いた美声だった。

4 | 夢と現実の間（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます!!!
頑張って脳内ストーリーを文章化させていきます!

5 | 本当の姿と

「んん」

眩しい太陽の光がわたしの目を睨越しに刺激する。

いつも寝起きの悪いわたしが太陽に起こされるなんて。

地震があつたつて震度4くらいじゃ目覚めないくらい寝起き最悪なのに。

肌寒く感じたわたしはいつも包まって寝るお気に入りの布団を探して手を動かした。

するとわたしが捜し当てるより先にふわりと布団が被される。

ママ？

由利恵かな？

ママは明け方にみんなの部屋を回って、お腹出して寝てる子たちの布団を直してくれるし、由利恵は時々いつの間にかわたしのベッドに潜り込んで寝てる時があるから。

布団をかけてくれたのはママと由利恵、どちらの可能性もある。

どっちだろう？

由利恵かな？

髪を梳くように撫でる手つきはすごく丁寧で、せつかく目が覚めたのにまた眠くなってきた。

顔にかかっている長い前髪を繊細な指先が掻き分けてくれる。

露になったわたしの額に温かくて柔らかいものが押し当てられた。

なんだろうと思って手を伸ばしてみると、わたしの指先に覚えのある滑らかな毛が触れた。

「ルル？」

わたしが尋ねてみると、額にあった温もりが水音を立てて離れていく。

「そっだよ」

頭上から降ってきたルルの声はいつもより低く、はっきりと聞こえてきた。

この艶やかな声には聞き覚えがあるけど、いつ聞いたのかははっきりと思いつかない。

どこで聞いたっけ？

朝日の眩しさを想定してそつと目を開けると、至近距離にあるアメジストの瞳とかがあった。

「おはよう神無。具合はどつっ？」

アメジストの瞳はそつと穏やかに細められ、その中にはわたしの寝ぼけた顔が映って見えた。

見慣れているはずのその瞳だけど今日はいつもと違う。

瞳を縁取る長い睫毛も、すっきりとおさまってる高い鼻も、瑞々しく潤う唇も、明らかに猫のものではない。

「
」

あまりにも整い過ぎてて、あまりにも美し過ぎて、もはや同じ生きている人間とは思えなかった。

わたしが知ってるのは猫のルルであって、目の前にいる美少女じゃない。

その美少女はわたしより2、3つ年下のように見られる。

丸みを帯びた輪郭と細い頸元は少女をより一層はかなげに、可愛らしく引き立ててた。

こんなに近距離から見てもきめ細やかな肌にはシミ1つないし、本当に人間なのか疑わしい。

思わず手を伸ばして恐る恐る美少女の頬に触れてみると。

「おお　！やわらかい　っ」

その肌はスベスベでモチモチでうっとりするほどの手触りだった。

美少女が抵抗しないことを良いことに、わたしは顔のパーツを一つ一つなぞってみる。

横に流した前髪で隠れていた眉毛を毛並みに沿ってひと撫でして。

ぱっちりとした大きな目を隠すように閉じられた瞼をそつとなぞる。

筋の通った鼻を通過して、ゆるりと弧を描く唇にたどり着いた。

血色の良い唇は予想以上に柔らかくて指で触れてしまうのが勿体ないと思えた。

「もしかして 天使？」

「天使？まさか」

わたしの記憶にあるこの美少女のような容姿をもつ物体は物語で出てくる天使様しかない。

だけど美少女はクスクスと可笑しそうに笑って否定する。

わたしはまだ夢の中にもいるんだろうか。

やけにリアルな夢の中に。

わたしを見つめて愛らしく微笑む美少女は一体。

「ねえ 僕も神無に触れていい？」

ぽけーっと阿呆っぱく口を半開きにしてたわたしに美少女は言った。
サラサラの金髪が美少女の肩から流れ落ちてきて、わたしの視界を
金のカーテンで覆う。

「やっと」

「え?! あっ、ちちちよっと!」

すいっと近づいてきた美顔に焦ったわたしは両手を突っ張って距離
をつくった。

美少女の身体はわたしの腕の長さ分離れた。

あからさまにほっとして息を吐いたわたしに、美少女は眉を寄せて
みせる。

女の子同士だからって急に顔を近づけられたら誰だって焦るよ

「神無。僕に触られるのは嫌?」

泣きそうに大きな瞳を潤ませて見つめられて答えに困った。

「いやとかじゃないけど」

「でも今、僕のこと拒絶したよね?」

「そんなつもりじゃなくて! えっと あの ごめん、」

わたしが悪いことしたみたいになってるのは不満だけど、先に断り無しに触れたのはこちらだから。

とりあえず謝っとく。

「じめん」

じゃあいい？と首を傾げておねだりするように言う美少女に、渋々と頷いた。

ありがとう、と言って花が咲くようにふわりと笑った美少女に不覚にもトキめいてしまう。

同性で、しかも自分より年下の子にトキめくなんて。

「神無」

そっと自分の胸にあるわたしの手を握ると、そのまま枕に押し付けた。

はい？

美少女の思わぬ行動に目を丸くするわたしを見下ろすアメジストの瞳は、見たものを虜にするような妖しい光を放っていて。

なんか危険だ！と感じた時はもう手遅れで、わたしの瞳は彼女から放せなくなっていた。

ゆっくりと再び近づいてきた美少女はわたしの剥き出しになった額にキスを落とすと、わたしがしたように目に鼻にと順になぞってい

く。

唇で。

「待って！あの、わたしっ」

女の子とキスしたりする趣味はないの！

と叫びたかったわたしの唇はあっけなく塞がれてしまった。

「ーっ！？」

押さえ付けてる手を押し返そうとしたけど、重力もあってかびくともしない。

こんなほっそ腕してるのに！！！！

必死に押し返そうとしてるわたしをあざ笑うかのように、美少女はぴったりと身体を密着させてきた。

布団が間にあるから直接は触れ合っていないはずなのに、わたしはその近さに恥ずかしくなっただけかあつと頬が染まるのを感じる。

真一文字に結んだわたしの唇にやわやわと軽いキスを繰り返してた美少女は、するりと自分の指をわたしの指に絡めて握った。

ただ手を握られただけなのにドキドキが増してわたしはパニック状態。

そんなわたしを知ってか知らずか、美少女は唇を離すと、少しずつ

ずらしていつて今度は耳たぶを口に含んだ。

「っわ　！なにしてっ　！」

初めて与えられる未知な感覚にビクンと反応したわたしを面白いがるようにさらに音を立てて舐める。

「やめてよ　っっ」

ちゅっつと耳元で音を鳴らして離れた唇は、またわたしの唇に戻ってきてさっきより激しく重ねてきた。

「ん　っ、　っ！」

緩んできた唇を押し広げて侵入してきた舌の感触にビクリと身体が反応した。

デ、デジャヴー！！！！

夢と現実の間で起きた出来事が鮮明に思い出されて、わたしの鼓動は持久走後のごとき運動量で活動しはじめた。

そうだわたし変態にキスされてハグされる夢、みてたんだ

これは夢の続き？

それとも　現実？

口内を動く彼女のそれには迷いがなく、自然にわたしのを導くように絡めとる。

カラカラに渴いてた口腔が潤いで満たされていく。

「っんぐ」

鼻に抜けるような呻き声が出てしまつて恥ずかしい。

酸素が足りないせいか頭もぼーっとしてくる。

「はあ」

「っは」

わたしにとって刺激が強すぎるその行為は、美少女の悩ましげなため息と共に終わりを告げた。

今まで男の子と付き合つた経験のないわたしはそれ自体初めてで。

だけど全く嫌悪感を抱かなかつたのは彼女のキスが上手かつたからだろうか。

「く、苦しい」

「慣れてないんだね。可愛いよ」

乱れた呼吸を整えようと口をパクパクさせてるわたしを見下ろすアメリジストは、さっきより色が濃く甘い視線を送ってくる。

うあああっ！

おおお女の子とキスしちゃった　わたしのファーストキス

「はあっ、これが夢なら、わたし欲求不満過ぎるよね」

独り言のようにつぶやいたわたしに、コツンと額をくっつけた美少女が小さく笑った。

「欲求不満なのは僕のほうだよ。待てなくて、無理矢理連れて来てしまったんだから」

「え。連れてきた？」

はたと我に返って自分の状況を考えて、ほてった身体から一気に熱が引くのを感じた。

そういえば、ここ、どこ？

今さら過ぎる疑問に答えてくれるのは、わたしを組み敷いてる目の前の美少女だけだろう。

やっぱり夢？

現実感のある人肌の感触や、眩しい太陽の光がわたしが作った夢の世界でないことは直感でわかる。

ここどこ?!

手は固定されたままだから動かせる首を使って自分のいる状況を確認しようとした。

ベッドは部屋の中央にあるみたいで、大きな窓から見える外の景色
と言えば、青い空とずっと先にある山だけだ。

部屋にあるインテリアはアンティーク風で、アイボリー色に統一さ
れた落ち着きのある雰囲気だ。

わたしが寝ているベッドは大の大人が2人並んでも余裕な程大きい。
無駄に広い。

しかも天蓋付きでカーテンにはレースがあしらわれてる。

天蓋付きベッドなんて初めて見た

まさにお姫様の部屋に相応しいこと。

一通り部屋を観察したわたしが再び美少女に視線を戻すと、今度は
彼女の格好に目がとまった。

これはまたオシャレな服を身につけている。

町でこんな服装をしてる人を見かけたら映画の撮影でもしてるのか
と思うだろう。

パツと見ただけでもそのブラウスの質が良さそうなのは予想できた。
袖口についてるフリルも控えめであっさりしてるのにさりげなく手
元を華やかに見せている。

緩められた臙脂色のリボンにはなにやら細かい刺繍が施されていて。

開いたブラウスの胸元から覗く鎖骨が色っばい。

身につけているシルバーのネックレスは、そのか細い首に似合わず鎖のように太いもの。

きつとフリフリなミニスカを履いてるんだろうなと想像して、それから伸びる華奢な脚を思い浮かべた。

「あれ、スカートじゃない」

ベッドに腰掛けて、上半身をわたしに預けてる格好の彼女の足元を見て少しがっかり。

黒いストラップスと焦げ茶色のブーツは案外彼女に似合っていて、美人はなにを身につけても様になるなと感心感心。

「スカートはさすがに履かないよ。男だからね」

「は？」

クスッと笑いを零して美少女は問題発言を投下した。

「ああ、儀式の時は正装として、男でもスカートみたいな仕様の衣装を身につけたりするけど」

「男の子？」

「僕？うん、僕は男だけど？」

わたしの空耳じゃなければ目の前の絶世の美少女様は自分のことを男だと言われた。

「ははっ うそでしょ？冗談？」

「嘘なんかじゃないよ。神無は女子とキスする趣味があるの？」

むっとしたような表情を作っても可愛いなあ　なんて思ってる場合じゃない！

「いやいや、ないけど。　そうじゃなくて！それ以前にっ」

なんだか混乱してうまく言葉が出てこない。

今わたしがいる場所がホームの自室じゃないことも、いきなり現れてキスしてきた美少女が実は男の子だったことも、理解する理解しない以前にすべてが謎すぎる。

意味がわからない。

なにが起きてるの？

ここはどこ？

貴方は誰？

お決まりの台詞が頭の中で繰り返される。

疑問すら口に来ないわたしを見兼ねて彼が先に口を開いた。

わたしの狼狽っぷりが顔に出てたのかもしれない。

「あちらの世界に居る時は猫の姿を借りて生活していたんだ。いろいろと都合があつてね この姿が本来の姿だよ」

美少年はしゃべりながらわたしを抱き起こした。

寝ていたせいかわりがくらくらする。

気持ち悪いし、頭痛もする。

「それでここは僕の自室兼研究室。ミリアス国王城の東塔だよ」

「ミ、リアス？ 国？ 城？」

「そう 神無の居た世界とは文化も科学の発達速度も違うけど、人間が生存しているということには変わらないから」

安心して大丈夫だよ、と言いながらわたしを抱きしめる腕はやっぱり華奢だった。

安心させるように白魚のような指が優しく髪を梳く。

「そ、そんな急に言われても」

聞き慣れない単語が美少女、と見せかけた美少年の口から紡がれるけど、わたしの頭にはなかなか入らない。

優しく撫でられたからって理解力が上がるわけでもない。

ザックリと現状説明されたところでへえそうですか、と納得できるわけもなく。

「言葉も、ちゃんと伝わるよ。日常生活に支障はないから大丈夫」

「いやあ大丈夫って言われても、わたし帰る 帰りたい。こんなところ知らないし」

「神無 申し訳ないけど帰すわけにはいかないんだ」

美少年は形の良い眉を八の字にしてすまなそうに言う。

「どうして？」

「どうしても」

「なんで？」

「神無、お願いだから」

「」

混乱の中においても冷静に会話できてるわたしを褒めてほしい。

だいたい、植物や動物の音が聞こえる自体おかしいことだから。

わたしが普通じゃないってことはなんとなく気づいてたし。

仮に、目の前の美少年が元猫のルーシエルだったとしても。

仮に、ここがわたしが知る世界から掛け離れた所だったとしても。

まあ受け入れられないこともない。

許容範囲 だ。

ただどわたしにはわたしの家族がいたわけだし、生活もあつたわけだし。

由利恵やママ、ホームの仲間がいたんだよ？

それをなんの断りもなく断ち切つて連れてきたと言うなら、あまりにも思いやりに欠けてると思う。

ひどいよ。

そう考えると慌ててたさつきが嘘みたいに、すんなりと状況が把握できてきた。

徐々に焦りは怒りに変わっていく。

わたしは渾身の力を込めてルールシエルの身体を突き飛ばした。

予想外の衝撃に目を丸くしつつも軽いステップで後方に下がったルールシエルを、ベッドに座ったまま睨み上げた。

動きに合わせて宙を舞う綺麗な金髪も、太陽の光を反射して宝石のように見えるアメジストの瞳にも。

今のわたしなら負けない気がする。

「わたしを連れてきた理由、帰せない理由、この世界がなんなのか、きちんとわかるように正確に教えて」

ふらつく脚を踏ん張らせて立ち上がり、無い胸の前で腕を組んで、ほとんど身長の変わらない美少年の双眼を見つめた。

数秒見つめ合った後、譲らないだろうわたしに彼の方が折れたようで、はあっとため息を吐いて格好を崩した。

「解った。君が言う通りちゃんと説明するよ」

「当たり前だよ」

わたしがふんつと鼻を鳴らすとルールシエルは困ったように笑う。

「知って得するようなことじゃなくても知りたい？」

「知らないほうが良いことってあると思うけど、無知ほど恐ろしいものはないと思うから」

「知ったらもう知らなかった頃には戻れないよ？」

「帰らせる気がないなら同じなんじゃない？十分巻き込まれてるんだから」

ルールシエルはわたしの強気な態度に苦笑を漏らして、そうだね、と小さく首を縦に振った。

「それじゃあ一から話そうか。でもそれは神無の体力が回復して

からだよ」

わたしの体力？と首を傾げると、頷いたルールシエルは驚くべき事実を言った。

「慣れない空間魔法を使ったせいで影響を受けた神無は、丸々3日間飲まず食わずで眠っていたんだ」

どつりで頭がクラクラするし脚がフラフラするわけだ。

脱水気味でかつ低血糖になってるなら仕方ないことではある。

それにしても 魔法、とはなんですか？

意識しだすと今までそれほど強く感じてなかった空腹感や倦怠感が一気に襲ってくる。

「そういえば お腹すいた。喉も渴いたし怠いし頭痛いし」

「朝食を用意させよう。なにが食べたい？頭痛も軽くなるように処置するよ」

「なんか軽いものが食べたい。クロワッサン。ココア飲みたい。

あ、プリン食べたい。あと お風呂入りたい」

わたしはぐきゅるると自己主張するお腹を両手でおさえた。

図々しくも要求するわたしに微笑んだルールシエルは、徐に膝を折りわたしの左手を恭しく取ると上目遣いで見上げてきた。

突然なんだろう、と思っで見下ろす。

と、ルールシエルはわたしと目を合わせたままある事か指の先にキスを落としてきた。

「っ、」

15年間生活してきてこんなことをされたのはもちろん初めてだし、これほどキザな仕草が似合ってしまう人に出会ったのも初めて。

「我が愛しき姫の仰せのままに」

目の前の美少年の口からなら、姫、なんて単語が出てきても違和感がない。

まさかとは思うけど、姫ってわたしのことを言ってるの？

一連の動作に瞳を奪われていたわたしがポーっとはうけてる今も、文句の付け所がない笑顔を浮かべているルールシエルは、どこからどう見ても貴公子そのものだ。

「順序を違えてしまったけど、改めて。私は王家直属の魔導師団団長を務める、ルールシエル・シュナイザー。我が権限をもって貴女を招喚させていただいた。歓迎する」

ようこそ、ミリアス王国へ

6 | 新しい世界で(1)

ルールシエルに連れてこられてはや2日が過ぎた。

まだ詳しくはなにも聞いてない。

尋ねようとしても上手くかわされて駄目だった。

美味しいご飯をいただいて、とりあえず休めと言われて寝かされている。

食物は元の世界とほとんど同じような形をしてたし、料理の味は少し薄めだけど塩分摂取量が多い日本人にはちょうど良くくらい。

それぞれの名前は違うけど、パンも米のような穀物も野菜もある。

どうやら豚肉は食べないみたいだけど、わたしは鶏肉派だから問題ない。

横になってれば眠れちゃうから楽には楽だけど、いたって健康体なわたしはそろそろ飽きてきた。

それにあちらの世界にいるだろう由利恵やママ、わたしの植物たちが心配になってきた。

聞きたいこともたくさんあるし

わたしは、よっこらせと歳に似つかわしくない掛け声と共にベッドから起き上がった。

この2日間はルールシエルの部屋から一步も外へ出ていないのだ。

部屋にトイレもお風呂も付いてるから外に出る必要がないと言うか、出させてもらえないと言うか。

食事はメイドさんとおぼしき女の人が運んできてくれる。

わたし用に部屋着とネグリジエを用意してくれた。

部屋の掃除は1日1回あって、その時はルールシエルの研究室で待機するんだ。

研究室は部屋の奥にある扉の向こうにあって、果てしなく続く螺旋階段を下った先にある。

ルールシエルに聞くとこの部屋は4階にあるらしいから、5階分の高さで距離を螺旋階段で上り下りするのだ。

地下の研究室は思いの外快適な空間で、まだ2回しかお邪魔してないけど結構気に入ってる。

四方の壁を隠すような背の高い棚にびっしりと並べられた本は、国語辞典のように分厚いもので見るだけで読む気がそがれそう。

瓶やら乾燥した薬草やら得体の知れない物体が押し込まれてる棚には興味をそそられた。

きらきらと光る石もあるけど、ホルマリン漬けにされてる生き物もいて、その用途に若干恐怖を感じる。

ルールシエルの広いデスクにはなにやら細かい文字で埋まった書類や、怪しげな色の液体が入った瓶が散乱していた。

ものによつては黒い煙りが漏れてるのだから大丈夫なのかと聞いた。
い。

壁は大理石のようなものでできていて、リンヤリとしていた。

部屋の中央に描かれているのが所謂、魔法陣つてやつなんだそうだ。大きな円形の中に六角形が描かれていて、解読不可能なアラビア文字のような字が隙間なく書き込まれている。

線が多すぎてなにを意味して描かれてるのかまったくわからない。

研究室で仕事をしてるルールシエルの横顔は、ひどく真剣なもので安易に話し掛けられない雰囲気醸し出していた。

だからわたしは部屋の隅にあるふかふかなソファーに座つて室内を観察するか、ルールシエルが持つてきてくれた絵本を読んでるくらいしかやることがない。

それでも1人ベッドでゴロゴロしてるよりは楽しいから、足がパンパンになるの覚悟でルールシエルの研究室にでも遊びに行くか、と思いついたところだ。

「もうあつちを離れて6日目だし 色々知らなくちゃなあ」

よくよく考えると恥ずかしいことばかりしてきたと思う。

食事の時はわたしの箸を使って食べさせてあげてたし、お風呂も一緒に入ったことがある。

そついえばあの時だいぶ暴れてたな。

結構一緒に寝ることもあって、顔や手を舐められたりもした。

じゃれて遊んだこともあったし

「わあああつー!!」

思い出せば思い出すほど恥ずかしい。

穴があつたら入りたいとはまさにこのことだ。

猫のルルと過ごした生活をすべて金髪美少年に置き換えてみると、もうじつとしてはいられないほど恥ずかし過ぎる。

「うわーっうわーっ最悪だーっ!」

ベッドの上でのたうちまわるわたしの姿を見た人が、どんなことを思っかなんて知ったことではない。

ふわふわな枕を手に取りぎゅっつと顔を埋めて羞恥心を抑え込めると、背後からクスクスと笑う声が聞こえてきた。

カバツと振り返ると、そこには眉目麗しいルールシエルがトレイを持って立っていた。

どこから見られてた？！

一人過去の醜態を思い返して悶えていた、なんて知られたくない。
かあつと赤くなつた頬を隠すかのようにルールシエルを睨む。

「こんにちは、神無。どうしたの？なんだか落ち着きないね。美味しいケーキがあるよ、お茶にしよう」 美

わたしのジトリとした視線など気に留めない美少年は、爽やかな笑みを浮かべて近づいてくる。

紅茶の香とお皿の上に乗ったロールケーキがわたしの意識を簡単に奪つた。

「ケーキっ」

抱き抱えてた枕をぽいつと投げ捨てるわたしを見ながら、ルールシエルは実に優雅な足取りでテーブルまでトレイを運ぶ。

今日のルールシエルの襟が大きく開いた白いトップスに紺色のストラップスを履いている。

高いところで1つに結わいた長い髪は、彼が歩く度にサラリと揺れてすごく綺麗。

ルールシエルのストレートな髪を見ると由利恵を思い出す。

由利恵も羨ましいくらい真っすぐな髪質をしていたから。

もう会えないかもしれない、そう思うと胸が急に苦しくなる。

由利恵

「こつちにおいで、神無。君が好きなイチゴも付けてあるよ」

テーブルの上にティーセットを用意したルールシエルの傍まで行くと、細い腕が伸びてきて有無を言わさず捕らえられてしまった。

「ちよつ、いきなりどうしたの？」

ささやかな抵抗をみせるわたしを両腕で抱え込んだルールシエルは、悲しそうな目でわたしを見る。

「神無がすごく寂しそうな表情をしたから」

「わ、わたしそんな顔してた？ ね、ねえ、ルルって年いくつ？ わたしより年下でしょ。なんか歳に合わない喋り方だね。前々から思ってたんだけど」

近距離にある美々しい顔にどぎまぎした心を落ち着けるためにわざと話を逸らしてみた。

身長が同じくらいだから本当に顔が近い。

「うん。 。 年は13だよ。神無より2つ年下かな」

「13?! 中1じゃん。なんか悪いことしてるみたい」

「悪いこと?」

年齢を聞いてびっくり。

年下かな？って予想はしてたけど。

13歳、中1と言ったらまだまだ外で駆け回りたいお年頃だろう。

授業中に消しゴムのカスを飛ばしたり、友達のノートに悪戯書きをしたり。

ルールシエルが校内で鬼ごっこする様子なんて想像もつかない。

しないんだろうな。

醸し出す雰囲気と実年齢がこれほど合わない人なんてそうそういないと思う。

「ねえ、」

「え？あ、えつと、」

抱き寄せてただけのルールシエルの手が背中を撫でて腰の位置で止まった。

腰なんて異性に触られたことがないからそれだけでビクッとしてしまっ。

ぎゅっと引き寄せられて身体がくっつきそうになったので、ルールシエルの胸に両手を添えてかろうじて密着を避けた。

明らかにただのハグではない。

飛んでた思考を目の前の美少年に戻すと、可愛らしく小首を傾げて尋ねてくる。

「悪いことって?」

「いや、だからね。ルルまだ子供でしょ?わたしも子供だけ。ほら、こつゆつことは良くないって言うか?犯罪ばいって言うか?」

「同意の元なら問題ないよ。僕の話は気にしなくて良いから」
いやね、わたし同意した覚えないんだけども

腰を引き寄せてる手とは反対の手でそつと髪を梳かれる。

耳の後ろ辺りから髪の中に指を差し入れられるとゾクつと背筋が粟立った。

「つ、」

「僕はこつして神無に触れていると心地好いよ。もう離したくないくらいだ。ずつとこつしていたい。神無は?」

ちよつと話題を逸らせるつもりだったのに、余計に可笑しな方向に向かつて進んでしまつてる。

こんな時どんなふうに戻事をしたら良いかなんてわからない。

あーとか、うーなどと声を漏らして時間を稼いでみるけど良い返答

は一向に浮かばない。

浮かばないどころか、ドキドキが大きくなってきて頭が真っ白になりそう。

顔を少し上に向けられ、あと少し距離が縮めばお互いの唇が触れてしまいそう。

ルールシエルの視線がわたしの唇に移るのがわかってどきっとした。

わあああ、どうしようっ

1度キスしたからって2回目からは緊張しない、なんてことはない。

そもそも最初のは不意打ちであり、ルールシエルが男の子だって知らなかったから油断してたわけであり。

今の若者がどういう思考でキスするかなんて知らないけど、わたしは好きな人とするものだと思うから。

挨拶やコミュニケーション感覚でしてほしくない。

「あ、あ、あのねルール！トモダチ同士でこんな風に抱き合っとならなくて、あんまりないと思うんだよねっ」

「友達？」

「そ、そう！わたし達、トモダチ、でしょっ？」

「」

ルールシエルの綺麗な顔が無表情になっていくのが本気で怖くて声が震える。

「る、ルールシエル？」

鋭くなった視線はわたし自身に向けられてるのではないと直感でわかった。

ただどこの2日間、笑顔しか見せなかったルールシエルが無表情になると、さっきとは違った意味で心臓がドキリと動く。

怖い。

ルールシエルの胸にあるわたしの手の平がじつとりと汗で濡れるのを感じた。

「神無にとって僕はただの友達なの？」

冷やかな声色はわたしの瞳に涙を溜めさせるには十分過ぎる効果を発揮した。

彼が纏うオーラまで水が凍りそうなほど冷たい。

急に機嫌が悪くなった理由を理解できないわたしは黙ったまま上目遣いでルールシエルを見つめた。

暴言を投げられたわけでもないのに泣きそうになってる自分が惨めだ。

瞬きも出来ず見つめるわたしと、わたしを見据えるルールシエルの瞳が交差することもの数秒。

わたしにとって非常に苦しい沈黙を破ったのは、部屋のドアを打ち破る勢いで室内になだれ込んできた大量の紙の山だった。

7 | 新しい世界で(2)

「やあやあ、我等が麗しき団長殿！有給休暇いかがお過ごしかな？」

バサバサと洋紙が散らばる室内に無遠慮に入ってきた男の登場に、ルールシエルはあからさまに不機嫌そうな顔をした。

さっきまでの感情の籠らない表情よりはまだ良いけど、悪い状況には変わらない。

第三者の訪問に溜息をつきたい気持ちめぐつと我慢した。

「ダネル、なんの用？僕の休暇はあと4日あるはずだけど」

ルールシエルは振り向きもせず答える。

「いやあ予想外に仕事が多くてさ、私一人じゃ捌けなくてね？手伝ってもらおうと思っただけよ、仕事！さあさあ一緒にやるんじゃないか！」

場の空気を読めない男の人の明るい口調に、ピクリと反応したルールシエルはふつと短い溜息を吐いた。

そうつと壊れ物を扱うような手つきでわたしの頬を優しく撫でる。

「この話は保留だね。また今度、ゆつくり時間が取れるときに2人だけでしよう」

いいえもうこの話は結構です、とはさすがに言う勇気が持てなかつ

たわたしは無言のまま頷いた。

わたしを見つめていたルールシエルの目元が、ふわりと緩んだのがわかってほっと肩の力が抜けた。

「おやー？おやおやおやおやっ！？」

散らかした洋紙をいそいそと集めていた男の人の注意がわたしたちに向いたようだ。

わたしを背に隠すようにして男の人に振り返ったルールシエルは、冷たい口調で言い放つ。

「仕事は手伝う。部屋からは出ていってくれ」

「いやー珍しいこともあるもんだね！仕事が恋人の冷徹王子様が有給とってまで部屋に引きこもってなにをしてるのかと思えばっ」

一息にしゃべった男の人はルールシエルの言葉を聞くどころか、床に散らばる紙をクシャリと踏み付けながらこちらにやってきたようだ。

残念ながら、ルールシエルの背中とベッドの天蓋が邪魔して、男の人の顔は見えない。

「ルール、王子様とか言われてるの？仕事が恋人？」

「。ダネル」

「水臭いじゃないか！私と君の仲だろう？意中の人がいるなら教え

てくれても良いじゃないかつ」

明るい調子で興味に満ちた声を発する男の人が気になって、ひよこ
つとルールシエルの肩から覗いてみた。

長い脚がチラリと見える。

「ダネル、それ以上近づかなくて良いから」

「そんなつれないこと言っでないで！君も隅に置けないなあ！紹介
してよっ」

「お前だけには紹介したくない」

「なんでさー?!」

「お前の目に曝したら彼女が汚れる」

「え？そこまで言っ？そこまで言っぢやう?!」

「言われるようなことをしてきただろ？」

「いやいやいやっ！君に言われたくないよっ」

仲良しなのか、そうじゃないのか。

言い合いを始めた2人から目を離れたわたしは、今だに宙を舞う薄
っぺらい洋紙を眺めた。

なんで浮かんでるんだろう？

「ルル、紙が浮いてるよ？なんで？」

「あ？ああ。邪魔だね」

ルールシエルの袖を引っ張って聞いてみる。

「今片付けさせるから」

空いてるほうの手を上げて風を切るようにヒュンと振り下ろす。

すると同時にふわふわと浮かんでた洋紙が一齐に床に落ちた。

「わっ！？」

「おお、さすが！私移動魔法は苦手なんだよー。風が言うこと聞いてくれなくてさっ」

「なら使つな。部屋が散らかる。使つなら習得してからにしてくれ。さっさと拾って」

これが魔法ってやつなのか。

確かに入ってきたときも尋常じゃない勢いだったもんね。

ドアが破れるかと思ったくらい。

「あの、はじめまして こんにちは？」

ルールシエルの背中に隠れて黙ったままにいるのも窮屈だったので、

一応当たり障りのない挨拶を試してみる。

相手の顔が見えない状態での挨拶は無意味に思えたけど、仕方ない。

「おおっ！私に話かけてくれてるんだね？！ルールシエル君、どいてくれないかな？私もレディに挨拶がしたいよ！」

ルールシエルは上機嫌な男の人に向かって盛大な溜息をついた。

すっと横に避けてわたしの隣に並ぶ。

肩に腕を回す理由はあえて聞かない。

少し離れたところに立っていたのは、ルールシエルまでとは言えないながらも、端麗な顔立ちをした青年だった。

顎のラインで切り揃えられた艶やかな黒髪に好奇心を隠さない茶色い瞳。

かっちりと着こなした黒い団服は細身な身体にフィットしていてよく似合っている。

能天気そうな話し方と不釣り合いなその容姿にわたしは目をしばたかせた。

「挨拶はそこから一步も動かないでしてくれ。これ以上近づかれて彼女に変な病気が移ったら困る」

「病気って ルル それはちょっとひどい言い方だと思うよ？」

「なんと可愛らしいレディだ！私を庇ってくれるんだねっ」

律儀にもその人はその場から動かずわたしに向かって話し掛ける。

「はじめまして、私の名はダネル・ルクス。王家直属魔導師団の副団長を務めているよ。よろしくね、可憐なレディ」

自分の左胸に手を当てて腰を折る姿は様になっていて、思わず感嘆の溜息が漏れた。

ルールシエルと同じようにストレートな黒髪が、はらりと一束顔にかかるのを掻き上げる仕種は大人の色気を醸し出している。

「レディ、貴女のお名前を伺っても？」

「え？あ、はい！わたしは神無っ！ ていいますっ」

うっかり見惚れてて。

声が裏返ってしまったのが恥ずかしくて視線を逸らせると、男の人にクツクツと笑われてしまった。

「カンナちゃん、ね。よろしく。私のことはダネルと呼んでくれると嬉しいなっ」

語尾に星マークが付きそうな話し方はちょっと残念だけど、副団長を任されてるあたりから悪い人ではないんだと思った。

挨拶が終わってもじいっとダネルさんを観察していると、ぐいっと肩を引かれて身体がよろめいた。

「神無」

「わわわっなにっ?」

「ほーう!これはこれは」

「っ、もう、どうしたの?」

ルールシエルの腕の中に閉じ込められたわたしが抗議の声を上げると、ダネルさんが感心したよう頷いた。

「あんまり他の男を見つめちゃ駄目だよ。僕が耐えられないから」

「た、耐えられないって」

至近距離でウルウルな瞳を見せられてたじろぐわたしに、興味津々といった視線を送ってくるダネルさん。

「見たところ既に契約も交わしてるようだし、そんな神経質になる必要ないんじゃないかなあ?」

その言葉に引っ掛かりを覚えて、ん?と首を傾げる。

「契約って?」

ダネルさんの登場にすっかり失念していた。

今日こそはいろいろと聞き出そうと思っていたんだった。

「ルル、そろそろ聞いてもいいかな？」

控えめに問い掛けてみると、ルールシエルはわかっていたかのように頷く。

「約束通り、質問に答えるよ」

「えー？なに、連れ込んでいてなにも教えてあげてないのっ?！」

ダネルさんが大袈裟な言い方で口を挟んだ。

「空間魔法で連れて来たから、本人の体力が回復するまで待つてもらってたんだよ。疲れてるときに聞いても頭に入らないよね？」

確かに、と頷くわたしを見ていたダネルさんは、ふーんと言って渋い顔をする。

「空間魔法、か。この一年半くらいちよくちよく姿を消してるのは知ってたけど なるほど。異世界にまで探しに行ってたんだね」

さっきまでの軽い調子ではなくなんだか深刻な話し方だ。

そういえば、猫のルールシエルと出会ったのは確か一年半前くらい。

「そう、運良く見つけれられたんだ 彼女を」

そんな前からわたしを？

探すってなに？

「それで？契約したら解けたの？」

「いや」

わたしは知らない事情を話す2人を交互に見た。

わたしが関係してる内容なんだろうけど、全く話の筋が掴めない。

「まだ覚醒してないってこと？」

「だろうな。まだ歳も16に満たない」

「そうだよねえ。12、3歳ってところならまだ無理だよね」

12、3？ わたし今年で16になりますけど

「とにかく。今日は神無に色々とこの世界について教えたいんだ。仕事は夜にしてくれ」

「それなら仕方ない。隣の部屋借りるからっ」

「わかった。書類は僕が移動させるからそのまま良い。それから」

会話に参加できないわたしは、テーブルに置かれたままのロールケーキと同じ気分だ。

紅茶は冷めきってるだろうな。

契約とか魔法とか覚醒とか、知らないことばかりで頭が痛くなりそ

う。

今日はどうしても知らなくちゃいけないことだけ聞いて終わりにしよう。

わたしは2人から離れてソファーに腰掛けた。

目の前には冷たくなった紅茶と表面が若干パサついたロールケーキがいる。

食べて良いかと聞こうと思って顔を上げると、同じタイミングで振り返ったルールシエルとバッチリ目が合った。

「神無、研究室に行くからちょっと待っててね？あ、ケーキは食べていいよ。紅茶は僕が入れ直すから飲まないでいて」

「はい」

まのびした返事をするわたしにニコリと微笑んだルールシエルは、ダネルさんとボソボソと会話した後部屋の奥へと消えていった。

「いただきまーす」

可愛らしいデザート用のフォークでイチゴをツプリと刺し口に運んだ。

普通のイチゴより小ぶりなそれは、甘くて、瑞々しくて、すごくおいしい。

「んーっ甘いー！」

思わずニヤけてしまう。

好物のイチゴに気を取られてたわたしは、ダネルさんが近づいて来るのに気がつかなかった。

「甘いー？カンナちゃんは美味しそうに食べるねえ」

ソファアを揺らさないようにゆっくりと腰掛けたダネルさんはわたしの顔を覗き込んだ。

「え？あ、甘い、ですね」

「ふーん。カンナちゃんは甘い物好きなんだー」

お互いの太股がピッタリとくっつくような距離に座られて落ち着かない

わたしを見てニコニコと笑うダネルさんはお皿に乗ってるイチゴを長い指で摘み取った。

食べるのかな？と思って見てみると、ダネルさんは持ったイチゴをわたしの口元に近づけてきた。

「はい、あーんして？」

「え?!」

自分で食べるわけじゃなくてわたしに食べさせるつもりだったの？

笑顔を崩さず戸惑うわたしにイチゴを突き付けるダネルさん。

「えっと わたし自分で食べられますけど」

「いいからいいからっ！ほら、イチゴが待ってるよ？あーんしてっ」
完全に子供扱いされてる

遠回しな拒否をかわされて渋々口を開くとすかさずイチゴが投入された。

「ん、」

モグモグと咀嚼するわたしを近距離で眺めていたダネルさんは、満足したのかにつこり笑って頭を撫でてきた。

彫りの深いダネルさんの顔は近くで見るとエキゾチックで。

ルールシエルといい、ダネルさんといい、男の人なのにどうしてこんなに綺麗な顔をしてるんだろ

ぼんやりとそんなことを考えてるとふいにダネルさんがわたしの顎に指を添えた。

「？」

わたしが持つてるケーキ皿を受けとってテーブルに置く。

「ダネルさん？」

「君には絶対に手を出さなつてルールシエル君から言われたんだよね。でもさ、私って性格悪いから」

ぐいっと顎を上げさせられダネルさんの顔が近づいてきた。

「!」

反射的にぎゅっと目を閉じると耳元に生暖かい息が吹き掛けられる。

「そう言われると逆効果なんだよね 君、すごく可愛いし 見た目ほど子供じゃないみたいだし、ね」

「っ」

耳元で囁かれるテノールの声にぞわわわっと鳥肌が立つ。

ダネルさんの、あまりの豹変ぶりに反応できない

「なーんてねっ!!」

「はえ？」

ぱつと身体を離れたダネルさんはおどけた風に笑った。

「冗談だよっ！確かにカンナちゃんは可愛いけどー。私は童女趣味じゃないんだよねえ、残念ながら!」

あははつと声を上げて笑うダネルさんを見て、ほつと胸を撫で下ろした。

「びつくりした　ダネルさんからかわないでください!!」

ドキドキと脈打つ心臓を鎮めるように手を胸に当てる。

ルールシエルの中性的な美貌とはまた違う独特な雰囲気のだネルさんに、ちよつとだけ魅力を感じたなんて絶対言わない!

わたしは苦し紛れにお皿を手にとってロールケーキを豪快に食べた。

「なになにー?ルールシエル君がいるつてのに私にドキドキしちゃった?カannaちゃんつてば浮気者ーっ」

ニヤニヤと含み笑いを浮かべるダネルさんはわたしの中で要注意人物に決定した。

安易に近づかないことにしよう!

「そんなんじゃないから!」

ふいつと顔を背けるわたしを見てふふつと笑ったダネルさんは、よいしょつと言つて立ち上がった。

「それじゃあ私は彼が戻つて来る前に御暇しようかなー。じゃあね、カannaちゃん!」

ダネルさんは、ラブラブしたことは内緒だよ?と口元に人差し指を立てて首を傾げた。

誰が言うか!

「さよならっ」

ぶっきらぼうな挨拶をするわたしに手を振って、颯爽とした足取りで帰っていくダネルさん。

完全に遊ばれた

どっと押し寄せる疲れを感じてソファアの背もたれに身体を預けると、ちよつどよくルールシエルが研究室から戻ってきた。

もうちよつと早く来てくれれば良かったのに

ルールシエルはわたしの恨めしげな視線に気づいたようで、隣に腰を下ろすとどうしたの？と尋ねてきた。

「別に」

ルールシエルの方を見ないでロールケーキに集中するわたしを暫く眺めていた彼は、思い出したかの用に散らかった部屋に視線を移した。

「まったく、散らかすだけ散らかして。突然で驚いたよね？ダネルはああいう奴なんだ」

ルールシエルがパチンと指を鳴らすと、散乱してた紙の山が一瞬で消えた。

「おおっ！」

驚いて目を丸くするわたしに向かって小さく微笑んだルールシエル

は、冷めてしまった紅茶のポットに手を添えた。

コポコポと音を立てたかと思うと、ポットの先から白い湯気が一筋天井に向かって伸びていく。

「僕は精霊とも契約をしてるから、こんな風に簡単に魔法が使えるんだよ。本来なら魔法を使うためには言霊が必要になるんだ」

「へえ　なんか凄すぎてよくわからないや」

正直な感想を述べると、ルールシエルはクスクスと笑ってわたしの頭を撫でた。

「ゆっくりと受け入れてくれたら良いよ。神無の世界じゃ馴染みがないことだもんね、魔法とかって」

「うん、」

ルールシエルは頷くわたしを抱き寄せると、猫がそつする様に入りにスリとほお擦りをした。

「もうルル、恥ずかしいからっ」

小さく抵抗するわたしの意見を無視したままぎゅっつと抱きしめるルールシエルの腕に安心感を覚えたのは何故だろう。

知らないことだらけの世界で頼れるのはルールシエルしかない、そんな風に思っるのはちょっとだけ心細いせいなのかもしれない

8 | 新しい世界で(3)

「はああああー」

深いため息が無意識に出た。

もうすっかり日が沈んで、わたしが知るお月様より何倍も大きいこ
つちの月が顔を出した頃。

約束通り半日かけてわたしにこっちの常識を教えてくれてたルー
リエルは、ただ今入浴中だ。

豪華な夕食を2人で食べて、先にお湯をもらったわたしはリラック
スタイム。

のほほほほ

色々新しい単語を聞かされて頭がパンク寸前でどうしようもない。

リラックスするどころか、聞いた単語を整理するのに必死だ。

とりあえず絶対に知りたいことを聞けたわたしはそれだけで満足だ
ったんだけど。

親切的なルーリエルは時間が許す限り永遠とこっちの事情を話して
くれた。

途中で集中が切れたわたしが適当に返事してるのに気づきながらも、
丁寧に説明してくれるルーリエルは中学の数学教師を思い出させ

た。

黒板に細かく式を書いていっては、何回もゆっくりと公式を解説してくれたものだ。

ルールシエルは教師なんかも向いてるだろうなーなんて思ってたわたしは、すでに現実逃避真っ最中だったんだと思う。

昼間絶妙なタイミングで現れたダネルさんと飛び回る紙っぺらにも、大して驚かなかったわたしを自画自賛したものだけ。

それは実は驚かなかったんじゃないかって、驚けなかったんだと、今さら気づいた。

自分で思ってたほどわたしは図太くできてなかったんだ。

人って驚きが大きすぎると反応できなくなるものなんだと新たな事実を発見。

そんな中で理解したのは、こっちでのわたしの立場と、あっちの世界の様子、それからルールシエルの大まかな生い立ちくらい。

わたしはこの城で、ルールシエルの‘契約者’として扱われるそう

だ。
魔導師は大きく分けて、攻撃魔法が得意な黒の魔導師と、防御魔法が得意な白の魔導師が存在する。

実力がある上層部の魔導師は攻撃魔法も防御魔法も使いこなせるそうだけど、やっぱり向き不向きがあって、根本的にはどちらかに偏

ってしまったってらしい。

だからそれを補うために、自分とは対極の能力をもつ魔導師か、それと同等の力をもつ人を探して契約を交わすそうだ。

上級の魔導師ともなると、国の重要機関に携わることになるみたいで、己の魔力の維持と安定のためには契約者が必要不可欠になるらしい。

契約するには、2人の相性も関係してくるらしく、面倒な話だと思う。

ルールシエルが言うには、わたしと彼の魔力の質は相性が良いらしい。

他国との権力争いはもちろん、国内でもいろんな派閥があって、一度上層部に入ってしまうとなかなか平和に過ごせなくなると言っていた。

契約しているのとしていないのだと大差があるらしいけど、わたしにはよくわからない。

契約を交わすには膨大な術式と契約を受ける側の生き血が必要になってくるそう。

2つの要素が揃って初めて契約成立に至るというわけだ。

夢と現実をさ迷ってたわたしに噛み付いてきたルールシエルの意図がやっとわかった。

最初から説明してくればよかったのに、と言いつつになつたけど、よく考えたらあの状態でこんな話しされても、素直に受け入れられるわけなかっただろうなと思ひ直した。

ちなみにルールシエルは黒の魔術に長けてると言つてたから、わたしには白の魔術なる能力があるみたいなんだけど。

全然そんなの感じないし、言われたところで自覚もできない。

と言つのも、魔術の元になる魔力は潜在的な能力で、だいたい16歳を過ぎたくらいに開花するらしいから。

今はほんの少し滲み出る程度の魔力しか放出してないそう。

まだわたしの力は眠つたままなのだ。ルールシエルは言つていた。

ならどうしてこの時期に連れて来たんだろう？

そんな疑問も浮かんできた。

たぶんそれには深い訳があるんだろうけど、ルールシエルは言葉を濁してはつきりとは言つてくれなかった。

次にあつちの世界の様子だけ。

どうやらわたしは存在自体が忘れられてしまつたみたいだ。

正確に言つと、わたしがいなくなつて騒ぎにならないように、ルールシエルが魔法で記憶を操作したらしい。

ママや由利恵や、ホームのみんなの記憶を。

突然姿をくらまして心配かけるのは嫌だけど、存在を忘れられるのも嫌だ。

でも実際、わたしの生きる世界はすごく狭いものだった。

わたし1人が世界から消えたとしても、困る人なんていないだろうと思うと、ちょっとだけ虚しい。

わたしの帰る場所はあるところじゃなかったのに

そうは言っても後の祭り、もうどうにもならない。

あつちとこつちの世界を繋ぐ空間魔法は発動させるのに相当時間がかかるらしく。

特に人を通過させるのは至難の技で、ルールシエルは1年かけて準備した末、今回の魔法を成功させたと言っていた。

だから帰れるとしても、1年後。

その間わたしはこつちで生活しなくてはいけない。

ため息以外に反応しようがなかった。

こつちの言葉が解るのは、ルールシエルの魔法のおかげみたい。

文字は書けないけどなんとかかなりそうだし。

胸にぽっかり穴が開いたような喪失感には消せないけど、1年待てばまたあっちの世界に帰してくれるってルールシエルと約束した。

その時にはみんなの記憶を戻すとも約束してくれた。

だから今はルールシエルの‘契約者’として、彼の力になれるように努力しようと思う。

平凡で、特に取り柄のないわたしを、本当に必要としてくれるよ
うだから

パタンとバスルームのドアが閉まる音が聞こえて、ルールシエルがお風呂から上がってくるのがわかった。

わたしは座っていたベッドから立ち上がって、大きな月が見える場所にあるソファア移动到る。

少し開いた窓から入り込む夜風が心地好い。

大きな月が世界で独りぼっちなわたしを見守ってくれてるみたいに感じた。

「神無、寒くない？」

少だけソファアを軋ませて隣に座ったルールシエルは、白いバスローブを着ている。

やけにバスローブが似合う彼だ。

濡れたままの髪は無造作に束ねられていた。

「寒くないよ。ルルこそ、ちゃんと髪乾かさなくちゃ」

「自然に乾くよ」

美少女に見紛うルールシエルだけど、髪の毛を労らないとかその辺はやっぱり男の子みたい。

みたい、というか正真正銘男の子なんだけどね。

5年も経てば超絶美男子になるにちがいない。

「神無、今何を考えてる？」

顔を覗き込むようにしてじっと見つめてくるルールシエルは、なんだか心細げな瞳をしていた。

「ルルが大人になったら超絶美男子になるだろうなって」

「それだけ？」

「うん」

まさか、あつちの世界のと似てる月を見て安心してた、なんて恥ずかしいこと言えない。

わたしはルールシエルから視線を逸らし、また月を見上げた。

「大きい月だね あつちの世界より何倍も大っ」

しゃべりかけたわたしの唇か、ルールシエルの唇で塞がれた。

突然過ぎて固まるわたしが反応する前に、強い力で抱きしめられる。

「っ、もーっルル!!」

即座に非難の声を上げると、ルールシエルはわたしを落ち着かせるように優しく頭を撫でてきた。

今日はよく撫で回される

頭ナデナデされたからって機嫌が良くなるような年齢じゃないのにつ！

「あ、あのさ、ルル。こうゆうスキンシップってこっちの文化なのかもしれないけど。あんまり、キス、とかしないでほしいんだよね、」

密着したまま抗議するわたしの髪を梳いていたルールシエルの手がピタリと止まった。

ちゃんと文化の違いは理解し合わないよね！

わたしはこんなにキスされる文化で育ってきてないしっ

「僕は 言葉で感情を表すのが苦手なんだ。だからこうして 態度で示してるんだよ?」

「た、態度でつて？」

「強く抱きしめて、キスをして、僕にとって君がどれほど大切なのか 伝えてるつもりだけど、」

わかるかな？と耳元で囁かれて背筋がゾクツとした。

トーンを下げたルールシエルの声は直接脳に響くようで、心臓にも悪い。

「わかった、わかったから！ちよつと離れてもらえる?!」

恥ずかしい台詞もルールシエルの口からなら違和感なくスラスラと紡がれる。

笑い飛ばしたくても笑うことすらできない。

「本当にわかってる？」

「わ、わかってるよ?」

「じゃあ僕が神無に触れることは許されるよね? わかってるなら」

「え？」

「うん」

完全に嵌められたと気づいた時にはすでに遅し。

うまくルールシエルに丸め込まれてしまった

目尻を下げて見つめてくるルールシエルの笑顔が、すごく黒く見え

たのは錯覚だったと思いたい。

「神無が望むなら僕はなんでも出来るよ。僕のすべては神無のものだから
ね？」

「え？ごめん、なに？」

「ううん？ 寂しくなったらいつでも言うんだよ？僕は隣の部屋にいるから」

最後の方が聞き取れなくて聞き返したけど、ルールシエルは答えられなかった。

その代わりにか、わたしの額に小さな口付けを落とす。

「先にお休み、神無。明日から神無に専属の侍女を付けるから、そのつもりでいて」

「え？う、うん。おやすみ」

さつきから、え？とかうん、とかそんな返事しかできてない。

ルールシエルにとってボディータッチは会話と同じってことなんだろうか？

それじゃあ他の人とも、こんな風に触れ合ってるの？

満足そうな笑みを残して部屋を出て行くこととする、ルールシエルの背中を眺めつつ思った。

「まあ ルルは13歳で子供だし 別に問題ない、のかな？」

わたしはチクリと針で刺されたような痛みを胸に感じたけど、気付かないふりをして再び淡い光を放つ巨大な月を見上げた。

8 | 新しい世界で (3) (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます m () m

9 | 居場所 (1)

暖かい温もりに包まれて目が覚めた。

このところ目覚めが頗る良い。

こっちの世界に来たばかりの時は身体が怠かったけど、それが良くなってからは逆に全身が軽くなったようにさえ感じる。

車もないし、電車もないし、空気が綺麗だからかな？

うつすらと開いた目に、カーテンに仕切られて光の入らない薄暗い部屋の天井が映った。

寝返りをうって横を向くと、枕に頬杖を突いてこっちを見るルールシエルと目が合った。

いつベッドに入ってきたんだろ？

わたしが寝たときにはまだ隣の部屋にいたはずだけど。

シパシパする目をゴシゴシ擦っているとやんわりと手を止められた。

「瞳が傷ついちゃうよ」

「んー」

ルールシエルは掴んだわたしの手を、そのまま自分の口元に運んでちゅっと口付けた。

「うぎゃっ」

慣れない恥ずかしい行為に奇声を発するわたしに、ルールシエルはくすつと笑ってチョコレートより甘い視線を送ってくる。

「おはよう、神無」

指を絡めて優しく握られ、ルールシエルのスベスベの頬に宛てがわれた。

「お、はよ。起きてたの？」

「1時間前くらいにね」

「起こしてくればよかったのに」

「可愛い顔して眠ってる神無を見ていたかったんだ。それにまだ朝早いし」

「えー 見られてるの恥ずかしいよ？」

むくりと起き上がるわたしに合わせて身体を起こしたルールシエルは、空いてる方の手で顔にかかる髪を掻き上げた。

どうにも色っぽい仕草だ。

「ルルって13歳なんだよね？」

「うん。どうして？」

「なんでもない」

13歳の男の子はこんなに色っぽい仕草をするものなのだろうか？
ぼやけた頭でそんなことを考えてると、わたしの手を離れたルールシエルの手がこっちに伸びてきた。

「ー？」

「はだけてるよ」

ルールシエルの視線を辿って自分の格好を見る。

「うお」

今まで着ていたパジャマは長ズボンタイプだったから、ネグリジェなんて着慣れない。

1番上に付いてるリボンは解けてるし、小さな可愛いボタンは見事に全部外れてる。

膝下まであった裾も捲れ上がってかろうじて臀部を隠してる程度。

非常に見苦しい。

前が開いてたとしてもわたしのささやかな胸では谷間なんてできないし、隠すほどでもないかと思ったけど、目の前にいるのは一応男の子だから慌ててボタンを留めた。

器用にもルールシエルはリボンを直してくれている。

「い、ごめん」

「いいよ。でも神無は無防備過ぎていけないね ほら」

「わっ!？」

わたしはぐいっと肩を押されてベッドに倒れ込んだ。

質の良いスプリングはわたしの体重を受け止めても軋まない。

「ルール？」

わたしの顔の横に手を置いて上から見下ろすルールシエルは苦笑いを浮かべた。

「隙だらけで心配だよ。僕のこと信頼してくれてるのかもしれないけど ね」

ルールシエルしか視界に入らない状況にドキドキするものの、この距離に多少慣れてきたものだ。

「心配って なにに?」

わたしは彼が何に対して心配しているのか純粹にわからない。

めくれた裾を片手で直しながら問うと、ルールシエルは呆れたようなため息をつく。

「神無。もしここに居るのが僕じゃなくて他の男だったら 襲われてるかもしれないんだよ?」

「へ?襲われる???つづ、あはははっ」

何を心配してるのかと思えば、わたしには無縁な話だった。

思わず笑ってしまったわたしをじっと見るルールシエルは眉を寄せている。

「ないない!だってこんな色気の‘い’の字もないわたしを襲う人なんていないでしょ??」

ね?と同意を求めるように首を傾げて見せるとルールシエルは紫色の瞳を細めてわたしを見据え、胸の上にそっと手を置いた。

「うえっ?!」

服の上からやわやわと撫でられヒクツと身体が震えた。

も、もしかしてあまりにも小さすぎて そこに胸があるって気づかれてない?!

だとしたら悲しすぎる

「あ、あの ルル?」

「なに?」

「えっと そこは」

「そこって?」

ルールシエルはしゃべりながらゆっくりと手を動かしている。

手の平を使って円を描くように撫でられて、わたしはだんだんと変な気分になってきた。

身体の芯がぽつと熱くなるような、不思議な感覚。

「ルールっそこ、一応わたしのっあ?!」

服越しに胸の先を刺激されてビクンと身体が揺れた。

自分でも反応しちゃう意味がわからなくて焦る。

「ルール!そこ小さいけど一応胸なんだよ!?!」

「知ってるよ?柔らかいよね」

「はあ?!」

清々しく言い返してくるルールシエルに対して、カーツと顔に血液が集まった。

ちよっ、知っててやってるの?!

「やめてよ、セクハラー!!!ルルのへーんーたーいー!」

足をバタバタさせて暴れるわたしを笑うルールシエルの笑い声はク

スクスと実に楽しそう。

熟れたリンゴの様に真っ赤になってるだろうわたしとは対称に、ルールシエルは至って冷静だ。

なんかすごく悔しい！

「ほら、僕にだって簡単に襲われてる。もっと本気で抵抗しないと逃れられないよ？」

「や、本気でつて、そんなことしたらルルが怪我、するかもしれないしっ」

「こんなときに僕の心配？ 余裕だね」

ルールシエルは口角を少しだけ引き上げるような不適な笑みを浮かべた。

やばい、やばいっ！

この表情をしたルールシエルは危険だ、と数日間学んだんだ！

「だ、だってさ、わたし童顔だし幼児体型だし？全っつ然色っぽくないからっ！き、キス、以上にはなにもされないだろうなって」

ルールシエルは、わたたと慌てるわたしを見下ろして満面の笑みを浮かべた。

「そうでもないよ？無垢な神無は心も身体もすごく魅力的だから。

余計、自分勝手に汚したくなる」

「よ、汚？、あ！ちよつと！」

ルールシエルは、シユルと自ら結わいたリボンを解いた。

首元に顔を埋めたルールシエルは、わたしが制止する前にちゅくつと音を立てて吸い付く。

「いたつ！」

「悪い虫避けくらいにはなるかな？」

「むむむ虫よけ??？」

ルールシエルは顔を上げて、ペロツとピンク色の舌で自身の唇を舐めた。

「わ、ひ、卑猥っ」

思わず正直な感想を述べると、ルールシエルはクスリと笑った。

「色々と教えてあげたいけど、もう、来た、みたいだしまた今度にするよ」

「??？」

コンコンコン！と鋭いノックがされたかと思うと、ルールシエルが返事をする前によく通る声が室内に響いた。

「失礼いたしますわ！朝ですよっ起きてくださいますし！」

「？」

首だけ捻ってそっちを向いたわたしは、口をあんどり開けて魅入ってしまった。

声の主は入口近くで仁王立ちしてこっちを見ている。

ズンズンズンとベッドまで近づいてきた、ルールシエルと瓜二つの容姿をもつ美女は。

きゅっと括れた腰に手を当ててこっちを睨んでる。

「じよ 女王 女王様 ？」

自分の状況をすっかり忘れるほど、彼女の存在は強い。

ボソツと呟くと、華美やかなオーラを放つ美女はきよとんと大きな瞳を丸くした。

カールした睫毛を瞬かせてわたしを見つめる。

これでもかと巻かれた金髪は、ルールシエルと同じく柔らかさそう
で、ふっくらした唇はグロスがのってぷるぷるしている。

ミルクの様に白い肌は頬だけ桃色に色づいていて、曇りのない空色
の瞳はガラスでできてるみたい。

シックな服装なのにオーラがすごい。

「ふつ。 あられもない格好で何を言うかと思えば」

上から目線な言い方だけど、わたしを見下ろすその目に負の感情は感じられなかった。

「ちょっと？いつまで幼気な少女を押しさえ付けてるつもりでしょ？
！貴方が少女趣味でも一向に構いませんが、男女の営みは日が沈んでからにしてくださいさる？」

美女の尖った視線は、今までわたしをいじめていたルールシエルに移り、辛辣な言葉を投げた。

いや、営みとか、そんなんじゃないんだけど！

「昼夜問わず発情してるのは4つ足で歩く動物と同じですよ？あ、発情周期があるだけ動物の方がましかしらね」

すごい美人だけどきつついなーと人事の様に聞いていたわたしは、無意識に服を直しながら2人を観察してみた。

こんなにそっくりってことは 姉弟？

姉弟揃ってこれほど美形ってことは、両親もきつとそういうことだよな。

顔が良くてスタイルも良いなんて 不公平すぎる。

「言葉に気をつけたほうが良い。自分の立場を理解してるならね」
事も無げな態度をとるルールシエルに対して、こめかみをヒクつか

せた女王様は、ツンと顎を上げさつさとベッドを整え始めた。

わたしはどうしたら良いんだろ

戸惑うわたしを差し置いて、ルールシエルは乱れたバスローブをさつと整えベッドを降りた。

ルールシエルは起き上がってどうしようかと考えあぐねてるわたしの頭をひと撫でして言った。

「神無、そこに居るのが昨日話した侍女だよ。僕の身内だから、遠慮無く好きに使って良い」

「え？あ、はい？やっぱり身内なんだ。すごく美人さんだもんね」

「うん。じゃあ神無をよろしく。今日は戻らないから」

言いながら、バスルームへと消えるルールシエルの後ろ姿を睨んでいた美女は、はあーっと大きく息を吐いてベッドの角に腰掛けた。

美女の揺れる髪から香る、甘い香にスンスンと鼻をならすと、ぷつと笑われてしまった。

目元が和らぐとさつきまでのトゲトゲしさが嘘みたいだ。

ベッドの上で両足を投げ出して座るわたしとは違って、スカートから伸びる脚を揃えて浅く腰掛ける様子は、育ちの良さを表してるようだった。

「ごめんなさいね、第一印象最悪でしたわよね？あたくし、兄様

の前だとどうしても。言い訳みたいですけど、見苦しいところをお見せしたこと、申し訳ないと思ってますのよ?」

ただの女王様キャラかと思ったら ツンデレ美女だった!!

唇を尖らせて上目使いで見てくる美女に、キュンと心を奪われた瞬間。

こんなギャップに男は落ちるんだろうな

1人納得していると、ふと会話を思い返して違和感を覚えた。

ん?

さっき、‘兄様’って聞こえた?

まさかね。

10 | 居場所(2)

「よっつと」

白いエプロンを後ろ手に縛り、準備万端だ。

黒いシックな膝上丈のワンピースに、フリル付き白エプロン。

ワンピースと同じく黒い靴下とローファーに似た少しヒールのある靴。

髪は邪魔にならないように、高いところで1つに結わいた。

侍女の制服に着替えたわたしは、ルールシエルが用意してくれた等身大の鏡の前に立っている。

「あらあ。あたくしより良く似合ってるんじゃないか？」

隣に並んだ美女とわたし、同じ服を身につけた2人が鏡に映った。

「マロンさんは髪結わかないの？」

今日もばっちり巻かれた金髪を自然に垂らしている美女 マロンさんは、ふふんと鼻で笑った。

口元に手をそえて上品に笑う仕草が似合わないのは、昨日1日一緒に行動してよくわかった事実。

腰に手を当てて「おーほっほっほっ」なんて高らかに笑う姿のほう

がしつくりくる感じ。

外見と中身は違うものだ。

「よくつてよ。あたくしは王城の下 コホン、侍女ではないもの」

今絶対、下女とか下婢とかそんな単語言いかけたな。

「貴女のお世話係を任せられただけですからね。それにしても楽な仕事ですわねえ」

髪をクルクル指に巻き付けながらしゃべる姿は、あっちの世界の女子高生を思い出させる。

「食事の配膳以外の身の回りの手伝い、ということでしたけど 貴女全部自分でこなすもの。あたくしにもすることありませんわあ」

そう言つてわたしが使わせてもらつてる大きなベッドに腰掛けたマロンさんは、現在18歳でわたしより3つ上のお姉さんだ。

飾り気のない侍女服よりも、美しい装飾が施されたドレスの方が相応しい様に思える彼女だ。

そんな彼女がわたしの侍女的な仕事を引き受けてくれてるらしい。

昨日は城の中を案内してもらつただけで1日が終わってしまった。

行つてはいけない階。

行っても良いけど行かないほうが良い階。

行っではいけないけど、行っても差し障りのない階。

説明されてもいちいち覚えられなかったけど

そんなこんなで忙しかったから、マロンさん本人についてはあまり聞けてない。

わかったことは、マロンさんの年齢と2歳の息子さんがいること、ルールシエルの身内であるということだけ。

出産経験があるとは思えないほど見事なスタイルを持つ、道を歩いてれば老若男女問わず振り返ってしまふような絶世の美女、マロンさん。

ルールシエルをそのまま女の人にしたみたい。

そんなマロンさんを、わたしみたいな小娘の世話係にするなんてルールシエルは何を考えてるんだろ？

とは言いつつも、身近にこっちのことについて教えてくれるような人がいてくれるのは、すごく助かる。

マロンさんは、ちょっと言葉遣いはキツかったりするけど悪い人じゃない。

今日は気分転換も兼ねて、外の庭に連れ出してくれるようだ。

城内をうろつろしても不審に思われない侍女服を、マロンさんに

用意してもらったのだ。

ルールシエルが調達してくれた服は、どれも品の良い物ばかりで袖を通すのが躊躇われる。

汚しちゃったらどうしよう、とか。

それに侍女服がなかなか自分に似合ってるように思えた。

むしろこっちのほうが良いかもしれない。

他人に世話をされるような高貴な生活なんて合わないんだと自覚した。

いつも部屋を掃除してくれたり、食事を運んでくれる年配の侍女さんに代わって、ルールシエルの世話をさせてもらおうかな　なんて考えてる。

なにもしないで生活するのは申し訳ない。

用意された朝食を食べ終え仕度が整ったところ、調度よくルールシエルが帰ってきた。

長いローブを羽織ったルールシエルは、心なしか顔色が冴えない。

緊急の用事が出来たと言って出て行ったから、昨日の朝からずっと仕事してたのかもしれない。

「ルールおはよう。あ、お帰り？」

鏡の前に立つわたしの傍まで無言で歩み寄ってきたルーシエルは、そのまま寄り掛かる様にして身体を預けてきた。

「わつとど ルル、大丈夫？」

ちよつとだけよろけたけど、そんなに体重をかけてるわけじゃなかったから受け止めきれた。

髪を上げたせいでさらけ出された首筋に、ぴたりと触れるルーシエルの肌が冷たい。

いつもと違う甘い香がふわりと鼻をくすぐった。

「ねえ、」

「うん？」

「なんでこんな格好してるの。僕があげた服は？」

「あ、」

疲れたせいかな、ルーシエルの声は掠れている。

耳元で話されると、息がかかってこそばゆい。

気づいたことだけど、わたしは多分首とか耳が弱いんだと思う。

マロンさんが、ベッドからわたし達をじーっと見ているのがわかって、なんかもう色々と気まずくなってきた。

「きよ、今日はね、マロンさんに外の案内を頼んだの。動きやすいように こっちの服を用意してもらったんだよっ」

「ふうん」

我ながらそれらしい言い訳が出来たと思ったけど、ルールシエルからは不機嫌そうな返事が返ってくる。

吐息がくすぐったくて、プルプル震えそうになるのを我慢するので必死だ。

「ね、休んだら？ルル徹夜してたんでしょ？」

視界に入る絹糸の様に細い金髪をそつと撫でれば、ルールシエルはそれを避けるようにわたしから離れた。

「昨日 汚れたから汚いよ」

「そつ？そんなことないよ。いつも通りサラサラじゃない？」

無造作に束ねられていても、質を失わない髪は相変わらず綺麗なのに

「あら兄様、自覚なさってるならさつさと洗い流してきたらいいかですか？ 香が残ってましてよ」

無言だったマロンさんはルールシエルを見ずに突然そんなことを言った。

ちらっとマロンさんを見やると、ニヤリと意地悪そうな笑みを浮か

べている。

「??？」

ルールシエルは、ハテナマークを頭上に浮かべるわたしの前で、罰が悪いような表情をした。

くるりと踵を返し、ささっとバスルームへと向かってしまっって声をかけるタイミングを無くしたわたしは、ん？と1人首を傾げるのだった。

10 | 居場所(2) (後書き)

読んでくださってありがとうございます！

11 | 居場所 (3)

「こっちですわよっ。早くいらしてー!」

「ちょっと待ってっば! ーここは?」

ひたすら長い廊下と大量の階段を越えたマロンさんとわたしは、重々しい扉の前にたどり着いた。

木製なのか金属製なのか、何でできてるか判断しかねる、細やかな彫刻で飾られたその扉。

「ここから外に出られるの?」

「そうですね。ここはある程度地位の高い人間でなければ、開くことを許されない扉ですの」

「へえー そうなんだ」

「ええ。 ちょっとそこの貴方、ここを開けていただけじゃないかしら?」

マロンさんが扉番らしき男の人に言うと、彼女の顔をまじまじと見たその人は、こっちがうるたえるほどの慌てぶりで開閉の準備に取り掛かった。

ルールシエルがあ若さで団長を務めると言ってたから、もしかしたらマロンさんもすごく地位の高い人なのかもしれない。

「正面から見る庭が1番綺麗なのよ！煩わしい人間関係の渦巻く腐ったような城の中で、唯一安らげる素敵な場所ですよ」

「ちよっ 腐ったようになって」

周りには兵士の様な方々がいるのに、気にするそぶりも見せずズバズバ言つてのけるマロンさん。

「あの マロンさん？」

「あら、なにかしら？」

「つかぬ事を聞くけど マロンさんって、もしかして本当に女王様だったりする？」

「女王様？くすっ まさか」

そう言つて笑つた表情や言動がルールシエルにそっくりだ。

やっぱり血の繋がった姉弟なんだ ちよっと羨ましいかも。

「女王ではないですわ。近いと言えば近いですけど。 開きましたわ。行きましょ？貴方達、ご苦労様でしたわね」

「はっ！いつてらっしやいませ！」

マロンさんの後に続いて扉をくぐると、兵士の方々はわたしにまで深々と頭を下げ下さつた。

「あ、ありがとうございます」

「はっ！どうぞ足元にお気をつけて！」

体育会系のようなハキハキとした言葉遣いで送り出されたわたしは、目の前に広がる景色に息を呑んだ。

「う、わぁ　！」

色とりどりの花々が咲き誇る広々とした庭　と言うより庭園と呼ぶべきそこに魅せられ、感嘆のため息が零れる。

一歩外に足を踏み出した瞬間、鼻をくすぐるような甘い香がわたしを包んだ。

マロンさんから香る甘い匂いとはまた違う、身体に染み渡るようなホッとする香だ。

久々に聞こえてきた植物達の声が、やけに大きく感じて耳鳴りがする。

声が大きすぎて、言葉としては認識できないけど、なんだかみんな浮き浮きとしているような気がする。

庭園の中央にある噴水から溢れる水は、しぶきが上がって太陽の光をキラキラと反射していた。

少し距離があるのにここからでも輝いて見える。

城の周辺に森があるからか、小鳥が遊びに来てみたいだ。

噂りが聞こえてきた。

ここ数日、外っていう外に出てなかったからかわからないけど、流れる風の音や、草花の色彩が一層鮮やかに感じる気がした。

感動に立ちすくむわたしを待ってくれてるマロンさんは、すごく穏やかな表情をしている。

この美しい庭園に癒されてるのかもしれない。

マロンさんのところまで走っていくと、心なしか身体がふわふわと浮かぶような感覚がした。

足が軽い。

「マロンさんっ！すごいね、すごい！！こんなに綺麗な庭園があるなんて！！」

わあわあ騒ぐわたしに、マロンさんは優しげな笑みを浮かべている。

「これだけ喜んでいただけると、あたくしとしても嬉しいですわ。噴水まで歩きませんか？」

「行くっ！」

走り出したい衝動を抑え、ゆったりとしたマロンさんの歩調に合わせて歩を進めた。

石で出来た細い道を通って噴水までたどり着くと、そこには水浴びを楽しむ色とりどりの小鳥達がいた。

わたしも一緒になって遊びたいくらい。

「すごい！真つ青な鳥がいるっ！」

「宝石の様ですわね。少しここで休みましょう。カンナ、バスケットをこちらに」

マロンさんはわたしが持ってたバスケットから、ハンカチを2枚取り出し噴水の縁に敷いた。

大きい噴水は縁も幅があつて、深く腰掛けても水しぶきがかかる心配はないみたい。

「さ、お座りになつて」

「ありがとう！ー 本当に綺麗なところ。こんなところ初めて来たよ」

「ええ、この庭は腕の良い庭師を雇つて管理させてますからね。一切魔法は使つてませんのよ？」

「へえ。噴水の水も澄んでるね！」

噴水を覗き込むと、ゆらゆらと揺れる水面がわたしの顔を映す。

水浴びをしていた青い鳥が一羽、わたしの肩に留まってきた。

「あら、ずいぶん慣れた鳥ですこと」

「だね、人を怖がらない」

『見ない顔だー。お姉さん姫様のお友達？』

「わっ?!」

肩に留まった青い鳥は、クリクリの黒目をわたしに向けて話かけてきた。

むこうの世界じゃ一方的に声が聞こえるくらいだったのに！

「こ、こんにちは、はじめまして？ あ、姫様ってマロンさんのこと？」

『そつだよ！驚きっ！お姉さん僕の声聞こえるんだね！』

試しに答えてみると、小鳥は嬉しそうに羽をパタパタさせている。

会話が成り立ってる！

「うん！わたしの名前は神無。あなたは？」

『僕？名前なんてな』

「カンナ？」

訝しげな表情をしてわたしを見るマロンさんに気づき、慌てて口を噤んだ。

小鳥の声が聞こえないマロンにとってみたら、わたしは独り言をしゃべってる変人にしか映らないだろうから。

やってしまった

「えっと あの」

「動物や植物の声を聞くことができるって話は、どうやら本当みたいですね」

良い言い訳を考えようとしたところに、予想外のコメントがなされ、わたしは「へ？」と間拔けな声を発してしまった。

「聞いてますわ。安心して？独り言しゃべってる変人なんて思ったりしませんわ」

「あ うん、ありがとう？」

『ねえねえ！なんでお姉さんは僕と話できるんだろうねっ』

どうやらルールシエルから聞いたみたいだ。

とりあえず変人扱いされて、避けられる恐れはないみたいだからよかった。

ほっと胸を撫で下ろす。

知らない間に、関わりを持った人から拒絶されることを、恐れていたみたい。

「良いですわねえ。あたくし動物なんて苦手ですわ。なにを考えてるかわからないもの」

『カンナ、姫様はこんなこと言ってるけど、毎朝僕らにパンをわけ
てくれてるんだよ?』

素直じゃない彼女が可愛らしくて、思わず小さく笑ってしまった。

「そうなんだ。マロンさんも動物好きなんだね」

「だから、苦手ですってば。その鳥が何か言ってますの?」

む、と形の良い眉を寄せていたマロンさんは、思い出したかのように
目をパチパチと瞬かせる。

「そうですね!全く人の手が入っていない花畑もありましてよ?」

「本当?!行きたいっ」

「あちらの方が野性の動物も多くいるでしょうから。でも今日は
無理ですわね。日を改めて、兄様に連れていってもらつと良いです
わ」

「うんっ! あ、そういえば」

すっかり忘れてた。

と言うより忘れるようにしてた事を思い出してしまった。

なんだか、それは早めに解決しないといけない事柄のように感じら
れるけど。

日陰を作るように立っている背の高い木の下には、2人掛けのベンチが置かれている。

あそこに座ったら心地良さそうだなあ、なんて現実逃避的に逃げ回る思考を無理矢理呼び戻した。

ふわふわつきつき気分が急降下するのにつかりつつ、腹を括って直球に尋ねてみる。

「ねえマロンさん、なんでルルのこと“兄様”って呼ぶの？ルルはマロンさんより年下なのに。マロンさんがお姉さんでしょ？」

「はい？」

マロンさんは怪訝そうな顔をして小首を傾げた。

それからなんとも言えない微妙な表情を作って、シャープな顎に指を当てる。

「まさかとは思っけれど、聞いてないのかしら？ どうしましょ、あたくしから話して良いのかしら。うーん どうしましょ」

だんだんと深刻な面持ちになっていくマロンさん。

一人でぶつぶつ呟いてるマロンさんを見て、やっぱり聞くべきじゃなかったかな、と思った矢先、それは爆弾のように投下された。

一瞬耳を疑ったけど、草花の囁きや風の音に負けない、澄んだ声を聞き違えるはずもなく。

「あの方、今年で21になりましたわ。身体は“13歳の頃まで
若返ってしまったけれど”」

12 | 居場所 (4)

『呪いですの。闇 あんの魔女から受けた呪詛。兄様は17の時に“肉体の成長”を奪われたのですわ』

マロンさんが目を伏せると長い睫毛が影を作る。

『以来、徐々に退化 つまり若返ってしまってますの。意識や魔力は変わらないのに いえ、年相応に成長してますのに、身体だけ幼くなっていくようで 魔力のコントロールが難しくなってるみたいですよ』

この世界では、魔女とか、呪いなんてものが普通にあるんだ。

なんでまた、ルルが？

『それは本人の口から聞いてくださる？ 兄様が呪いをかけられてから4年が経ちましたわ。今は13歳の頃の姿をしています。あと13年間呪いが解かれなければ 赤子に戻り最終的には』

なにそれ。

最終的には なに？

マロンさんの悲愴な面持ちは、言葉の続きを無言で訴えてきた。

『今年いっぱいの特例で与えられた数々の権利が剥奪されてしまうのですわ。12歳まで戻ってしまったら、ここでは子供として認識されますから』

権利剥奪？

今の地位ではいらなくなるって意味だよな？

その、呪いを解く方法はないの？

『呪いを解く方法？ありましてよ。呪いをかける方法があるならば、解く方法だってきつと』

“きつと”てことは 今はないんだ。

『魔女の力は特殊なのですわ。だから同じ魔女にしかその力を相殺できないのよ。しかも対極の、光 こう の魔女の力が必要な』

じゃあその光の魔女を探して来れば良い話じゃない？

『そう簡単にいかなものですよ 光の魔女は争いを好まないから、陰謀渦巻く場所には現れませんの。探そうとしても姿を眩ませます』

じゃあどうやって光の魔女を見つけたら良いの？

『そう、そこで兄様は、まだこちらの人間が入り込んでいない異世界まで、光の魔女の“質”を持った人を探しに行ったのですわ。そこでようやく見つけた 貴女です』

え？

見つかった？

わたしが??

『 って聞いてませんの? ええ?! 知らないですって? 契約? あまあ必要ですわね、上層部の魔導師ならば』

わたし、何もできないよ ?

わたし、ただの人間、だよ?

『今は未だ、ね。 そう聞いてなかったのね 貴女の力が兄様の運命を握っていると。 だから、』

「、な。 神無?」

「えっ? あ、ああ、なにっ?」

怪訝な表情をした眉目麗しいルールシエルがわたしを見つめている。
いけない、ポーツとしてた。

マロンさんから重大事項を聞いたあの日から、3日経って今にいたる。

事は深刻で、どう触れて良いのかわからない。

にわかには信じられないけど、ルールシエルの大人びた雰囲気や仕事をよくよく観察してみると、頷ける。

どう見ても13才の少年には思えなかったから。

羽織ってた上着を脱いで、シャツのボタンを外すところとか、グラスを持つ手つきとか。

それはそれは大人っぽかったから。

心は成長するのに、身体だけ幼くなってくってどんな感覚なんだろう？

できてたことが、できなくなってく感覚 かな？

まったく、呪いってなんなの？

魔女ってなに。

何日かぶりに2人で朝食を摂ってる最中に、そんなことで頭がいっぱいになってしまう。

このところ朝からずっとマロンさんが一緒にいてくれたから、ルーシエルのことだけを考えなくて済んでたけど。

こうして2人きりになってしまうと困ったことに、必然的に意識は彼に向かってしまうんだ。

「ごめん、なんかぼーっとしちゃってた」

強張った表情を見せないようにと思って笑ってみたけど、彼はわたしのささいな変化を見逃してくれない。

「何かあった？考え込んでるみたいだけど。ほら、」

すっと視線を下げた先には、一口大にちぎったパンが山になってい
るお皿があった。

口に運ぶのを忘れてひたすら手だけを動かしていたようだ。

「あ
」

「僕になにか隠してる？前はもっと色々話してくれてたのに」

眉毛を下げて寂しそうな表情をされると、思わずサラサラふわふわ
の髪を撫でてあげたくなる。

けど相手は自分より年上の、成人男性だと言うことを忘れてはいけ
ない。

この美少年の実年齢は21才なのだ。
なでなでするなんて論外だろう

それにね、以前いろんな話をしてたのは、貴方を人だと思ってなか
ったからなんですよ

「もしかして、侍女マロソに何か吹き込まれた？」

一瞬ギクツとしたけど、努めて表情にださないように平静を保った
わたしは、首を横に振ってごまかした。

「ううん、なにも？たださ。今みたいになにもしないで衣食住世
話してもらってるの、申し訳なくて」

嘘は言っていない。

住む所、食べる物に困らなくて済むのはとても助かるけど、1年間こちらで暮らしていくなら仕事を見つけないと。

そもそも、わたしが連れてこられた理由を明確にして、やるべきことをやらなくてはいけないはずで。

「わたしにできる事、ないかなって思ってた」

どうすればルールシエルの役に立つのだろうか？

秘密を知ってしまった以上、のんきに生活していて良いとは思えない。

一刻も早く、魔力を身につけなくてはいけないはず。

でも自分が魔法を使えるようになるなんて、想像つかない。

複雑な心境だ。

ルールシエルのためになにかが出来ないなら、わたしがこちらに居る理由がない。

もんもんと考えはじめると朝から気持ちが悪くなる。

第一、彼自身がわたしに本来の目的を言ってくれないんだもん、どうしたら良いかさっぱりわからない。

「神無は僕の傍に居てくれれば、それで良いんだよ。契約もさせてもらったし、今すぐに何かする必要はないから」

「や、でも」

早く呪い、を解かなくちゃいけないんじゃないの？

とはさすがに聞けず、黙り込むわたしにルールシエルは温かい視線を向ける。

「君はまだ自分の内に秘めてる魔力を自覚してないみたいだけど、こちらの空気に当たっていけば自然と身についてくるから大丈夫。心配しないで、今は体調を崩さないようにして、こちらの世界に早く慣れてほしいんだ」

「うーん。。。」

ルールシエルはわたしを無理矢理連れてくる程焦ってて、早く呪いを解きたいはずだろうに、どうして話してくれないんだろう。

山になったパンを口に放り込みながら頭を悩ませる。

「ねえそういえば、侍女の仕事をしたいって言ってたみたいけど？」

ルールシエルは食べ終えた食器を片付けに、絶妙なタイミングで入室してきた侍女のセリーナさんをちらりと見やった。

「そんなことする必要はないけど、どうしても仕事をしたいというなら、僕の手伝いをしてもらって良いかな？」

「ルルの手伝い？うん、是非ぜひ！できることならなんでもするよ」

「ふふ、神無は真面目だね。そういうところも含めて、すごく好きだよ」

ルールシエルは口角を少しだけ上げて笑みを作る。

テーブルの上に置かれたわたしの手に、そっと自身の手を重ねると円を描くように撫でてきた。

「なんでもする、なんて言われちゃうと無理なこともお願いしたくなるな いいの？」

艶っぽい笑みを浮かべてそんな台詞を言われたら、意味はわからなくてもドキドキしちゃう。

なんなんだ、ルールシエルという男は。

普通の女の子なら色々勘違いして、コロッとオちちやうに違いない。

罪作りなやつめ。

赤くなっただろっ顔を背け、さっそく仕事内容について尋ねてみることにした。

「で、何をしたら良い？わたしにもちゃんとできるかな？今日から始める？まだ城の構造とか把握できてないんだけど」

「あははっ、そんなに焦らなくて良いよ。最初は簡単なお使いから

頼もつかな」

なんだかルールシエルの優しさが伝わってくる。

慣れないこちらの生活に少しでも馴染めるように、少しでもストレスを感じないように、とわたしに気を使ってくれている。

でもそれじゃ駄目な気がしてならない。

元の世界に居た時は、何の目的もなくただただ毎日を過ごしていいよかった。

それが幸せだと思ってたし。

愛してくれる人の傍で笑ってられる毎日が。

でもここではわたしにしかできないこと、を見つけてみたい気持ちもあるのかもしれない。

ルールシエルもマロンさんも、親切にしてくれるから甘えてしまってたけど、そもそもここにわたしの居場所はなかったはずだから。

自分の力で自分の居場所を作らなくちゃいけないんだ。

今までみたいに与えられるモノをただ受け入れるんじゃないなくて。

「明日から仕事頼もつかな？僕の部下を紹介するね」

目を細めて微笑むルールシエルが遠く感じる。

そっか、わたしは焦ってるんだ

今この世界に、わたしの居場所は ない。

そう気づいてしまったから。

12 | 居場所 (4) (後書き)

あけましておめでとございますm () m
だいが遅くなってしまいました。。またゆっくりペースで頑張り
たいと思います！

13 | 新たな一面(1)

「ほう、おぬしが主の。ずいぶんと可愛らしいのう。主は女の趣味が変わったようだな。どれ、こっちを向いてみよ」

「は、はあ」

わたしの顎をがっちりと掴み、右に左に向きを変えてじいっと見つめてくる、やけに古めかしい言葉を使う少年。

彼もルールシエルの部下らしい。

ルールシエルが直接指示をする部下は3人いて、1人は変人で変態のダネルさん。

あとの2人が、今わたしを品定めするようにジロジロ見ているシャスさんと、感情の籠ってないビー玉のような瞳でこちらを観察しているシャンさんらしい。

2人はそっくりで案の定双子だと言う。

背丈も容姿もそっくり。

中性的な顔立ちをしているせいで、性別すら区別がつかない。

シャスさんは男でシャンさんは女だそうだけど。

なぜこの2人と一緒に居るかと言うと わたしが仕事をしたいと言
い出したからだ。

1人で仕事をするにはまだ難しそうだから、2人のどちらかと一緒にやらせてもらうことになったのだ。

にしても 厄介な呪いを受けてるルールシエルを団長に、その部下達も一癖も二癖もありそうだ。

「ちょっと あの、近いんですけど」

わたしよりちょっと高い位置から見下ろすシャスさんの顔が、異様に近いのは気のせいではないはず。

背を反らして距離を取ろうと試みたわたしに、シャスさんは大袈裟に反応した。

「おお、すまん。いや旨そうな匂いがするもんだからな、ついつい」

己の唇をペロリと真っ赤な舌で舐めるシャスさんに、ゾツと鳥羽がたつ。

薄く開いた唇の隙間から覗く鋭い犬歯は、人のものではないようにも見えた。

言い表せない恐怖のような感覚がわたしを襲った。

「、旨そうって わたし食べ物じゃないです」

「良い香りがするんじゃない。汚れのない純潔の香り。おぬし生娘じゃ
る」

「匂いでわかるんですか?!」

セクハラもいいところだ!

羞恥で熱くなった頬をそのままに、非難するような口調で言うと、
シヤスさんは口角を吊り上げてくくつと笑った。

本当の意味で食われそう。

危ない光を瞳に宿したシヤスさんが、わたしの顎を掴んでた手を下
方に滑らせ頸動脈に指先を当ててくる。

身の危険をひしひしとを感じる。

カチンコチンに固まったわたしを見下ろす双眼は、嬉々として輝い
て見えた。

多分気のせいじゃない。

え、このままだとわたし色々とまずい気がする。

「ちよちよ、ちょっと待ってくださいっ」

「シヤス、それくらいにしておけ。手は出すなと言われたのを忘
れたか?」

さつきからだんまりだったシヤンさんの一声で、シヤスさんは心底
残念そうにわたしから手を離れた。

ホッと緊張が解けジリジリと後ずさるわたしを尻目に、シヤスさん

は大きなため息を吐く。

「シャン、お前は相変わらずお堅すぎじゃ。ただの戯れではないか。ちよっとした触れ合いだろう？新しく仕事を共にする仲間の顔をじっくり見ていただけじゃ」

な？と同意を求められても頷けるはずがない。

十分に距離を取ろうと思って窓際までささっと移動した。

わたしを見ていたシャンさんは、ほらみるとばかりの顔をシャスさんに向ける。

「完全に警戒されてるぞ」

「ふはははっ！生娘の反応は初々しくて可愛らしいからたまらんな
」！

さつきから生娘生娘連呼して、セクハラもいいところだ！

「あの！き、生娘とか言わないでください、セクハラですよ！！」

「「セクハラ？」」

見事なハモリを披露されて少し引く。

「セクハラって言うのは、職場とかで男性から女性に対して行われる性的、差別的な言動のことです！反対の場合もあるけど！」

「ほう、なるほどな」

わたしの説明に納得したように頷く2人を視界にいれたままため息が出た。

強気で言い返したけど気分はただだ下がり。

この2人とうまくやってけるのかな？

シャンさんはともかく、シャスさんは本気で危険な気がしてならぬい。

「まあまあ、そう固くならんで。ワシらは主の信用を得て今ここにおる。安心するが良いぞ」

胸を張って言い切るシャスさんは、さつき散々ルールシエルにわたしに手を出すなよと念を押されていたような

大丈夫かなあ

「さて、そろそろ仕事に取り掛かろう。今日はワシと共に行動してもらおうぞ」

わたしの不安を意に介する様子もなく、ズンズンと近づいてきたシャスさんに手首を掴まれた。

あげそうになった悲鳴を飲み込み、自由な方の手を咄嗟に伸ばしてシャンさんの手を掴む。

「お？何をしておる」

「い、いや」

「」

「おい、何故シャンを掴む。離さぬか」

「あの、ですね」

「」

「おい、」

「えっとー」

「」

3人横一列に並んだ状態でわたし達はフリーズする。

沈黙の空気が流れて、シャスさんは眉をひそめてわたしを見る。

シャンさんはあからさまに迷惑そうな視線を投げてきた。

わたしがシャンさんの手を離せば良い話なんだけど

この手を離して1日シャスさんと一緒にいるのは、正直怖くて無理だ。

外見が問題なのではなく。

むしろぱっちりした瞳は可愛らしいし。

膝上までの短めのローブを羽織ってる身体は、見た目からして華奢だし、とても乱暴するようには見えないけど

なんと言つか、シヤスさんは雰囲気からして野生味があつて 安心感に欠けてるんだ。

「えっと 今日シヤンさんの仕事を 一緒にさせてもらいたいなつて、思つてて」

「シヤンと？ 何故じゃ」

シヤスさんは器用に片方の眉だけを上げてわたしを見た。

まったく、ルールシエルはなんで居てほしいときにいないんだ！

それらしい理由を探して視線を泳がすわたしに、シヤンさんは短いため息をついた。

「 良いだろう。シヤス、今日は私が共に行動する」

相当困った顔をしていたのか、わたしの顔をチラリと見たシヤンさんは、仕方なくといった風に了解してくれた。

パツとわたしの手首を離れたシヤスさんは肩をすくめてみせる。

「残念、ワシは怖がられてしまったようだのう。 仕方がない、本日はシヤンと共に行け？」

「あ、ありがとうございますっ」

光を宿してないシャンさんの瞳は作り物のようで、何を考えてるのが解らないから気後れするけど 同性だからか怖くない 気がする。

「シャンさん、よろしくお願いします」

シャンさんは、手を離してぺこりとお辞儀したわたしに無言で頷いた。

安心からか、自然と顔の筋肉が緩む。

ほっと胸を撫で下ろすわたしの、頭の前から爪先まで視線を這わせたシャスさんは閉じていた口を開いた。

「それにしても。間近で観ると一層幼いな 着痩せするのか？」

「はい？」

シャンさんが言わんとしてる事が解らず間抜けな返事をしてしまった。

「そんな幼児体型でどうやって主を落とした、と聞きたい」

「お、落とした？」

「胸も尻も気の毒な程に無いように見えるか？」

「はあっ!？」

「気の毒って!？」

ピシッと笑顔を貼付けたまま固まるわたしを、チラチラ見ながら笑いを堪えてるシヤスさんが視界に入った。

「床が上手いようには見えないが。いや、無垢な顔して淫乱な性向なのかもしれないな」

誰が淫乱だよ！！

「く、ぷぷつー！」

肩を揺らして笑いを噛み殺しているシヤスさんを見た後、視線を平行移動させてシヤンさんを見た。

シヤスさんは玩具を見るような目でわたしを見るし、シヤンさんは見下したような視線を送ってくる。

敵意は無いようだけど、どう考えても好意的ではないのが明らかで。

どうやら2人とわたしを快く思っていないみたい。

確信にも近いものを感じ、深いため息を吐きたい気持ちで潰されそうだ。

この世界でうまくやっていける自信が、まったくなくなった。

「もう ありえないわ」

仕事をもらえた初日から、気分は急降下する一方だ。

13 | 新たな一面(1) (後書き)

ずいぶん間が空いてしまいました…;

14 | 新たな一面(2) (前書き)

アクセス、お気に入り登録ありがとうございます！

14 | 新たな一面(2)

覆水盆に返らず だっけ。

後悔先に立たず、かな？

ちょっと違つかもしれないけど、多分そんなかんじ。

どうして黙ってシヤスさんの方に行かなかったんだろう。

素直について行けばあんな場面見なくてすんだのに。

自分が予想外に衝撃を受けてるということに、笑いすら込み上げてくる。

「はああ」

いやね、予想してなかったわけじゃないけど。

あんなに美形なんだから、幼くたって恋人がいるかもしれないってわかってたよ。

そもそも中身は大人なんだし。

だけど目の前で、なんの前触れもなく、濃厚ラブシーンを見せられたら、誰だっけってうるたえるわ！

見られてた本人は気付いてないかもしれないけど、こっちとしては気まず過ぎる。

同じ部屋で寝起きするのなんかやだなあ

どんな顔して話せば良いんだろう。

お馴染みとなった部屋の前で行ったり来たりウロウロ歩き回ってたわたしは、少し落ち着くために来た廊下を戻ろうと思った。

確かこの階の角の部屋にはピアノが置いてあった気がする。

そんな上手には弾けないけど、気を紛らわせるには調度良いかもしれない。

それは半日前のこと。

結局シャンさんの仕事を手伝うことになったわたしは、背筋を伸ばして颯爽と歩いていく彼女の後をワタワタと追っていた。

長い廊下を過ぎ、渡り廊下のようなところを越え、たどり着いたのは資料室。

ルールシエルの研究室にあった資料を、遥かに超えるほどの書物が鎮座しているそこ。

古い本特有のかび臭い臭いはしないけど、ちょっと異質な空間だなって思ったのが正直な感想。

この資料室に入るのに3回も鍵の掛かったドアをくぐったし、中央

にある円柱の棚にびっしりと収納されてる本は、見る度に場所が変わっている。

背表紙がキラキラ光って綺麗だなんて目についた本が、次に見た時にはその場所から消えてたり。

ここにも魔法が使われてるんだろうな。

ずっと上の方に天井が見えるから、一応この棚にも終わりがあるよ
うなのでホっとした。

円柱の棚を中心に螺旋階段があって、どうやら階段を上がり下がり
して目当ての資料を探すらしい。

「明日は筋肉痛決定だ。」

「一体何階まであるんだろ」

「1、2、3 7、8」

「21階だ」

「に、21!？」

階を数えようとしていたわたしに、シャンさんはボソッと教えてくれた。

その数を聞いて開いた口が塞がらない。

「ここで、目当ての資料を、探すんですよね？」

「そうだ。捜し物は私がする。お前は13階の5番室内に居ろ」

「は？」

13階まで上れと。

シャンさんは涼しい顔でそう言うと、自身は軽い足取りで螺旋階段を上り始めた。

本の背表紙を細い指でなぞり、ぱっぱと選んでいく。

わたしがポケーッと眺めている間に、両手いっぱい資料を抱えたシャンさんは、上るスピードを変えないままある階まで上りきった。

「13階の5番はここだ。ここで待ってる」

上からふってくるシャンさんの声が室内に響く。

心なしかこだまして聞こえるような。

あんなとこまで上るんだ

仕方ない、とため息をついたわたしは、螺旋階段をギツと睨みつけて気合いを入れた。

順調に上り始めたものの6階くらいで息があがり、柵にもたれ掛かって休んでると。

表情一つ変えないシャンさんが、わたしの目の前を通って降りて行

った。

それから何冊か分厚い本を抱えて上ってくる。

何往復してるんだろう

汗はかかないにしても、ゼーゼーしてるわたしと違い、シャンさんは呼吸を乱してる様子はない。

絶対体力お化けだ

ふうつと息をついた後、わたしはまた重たい脚を持ち上げた。

日々の運動不足さを痛感させられながら、やっとこさつとこ13階まで上りきることができた。

1つの階に部屋が5つあって、そのうちの一室のドアが少しだけ開いていた。

「ここが5番？」

恐る恐るドアノブに手を添え押してみる。

キィ と小さな音を立てて開いたドアの中には、資料が山積みになったガラスのテーブルとオシャレなソファがあった。

全体的に暖色系で統一された、隠れ家のようなその部屋は居心地が良さそうだ。

部屋に足を踏み入れると、フカフカの絨毯が受け止めてくれる。

部屋に1つだけある大きな窓からは太陽の光が控えめに差し込んでいた。

そろそろ窓際まで行って外を眺めてみる。

13階まで上っただけあって　それなりに高い。

遠くに建物が密集する場所が見えて、あれらが城下街みたいなものなんだと思った。

それ以外にあるのは、森のみ。

本当に自然が多い場所なんだ

緑に癒されてほっと息を吐き出すと、いつの間にか部屋に居たシャンさんがコーヒーをのせたトレイを持って近づいてきた。

「あ、ありがとうございます」

無言でカップを差し出した彼女は、自分の分のコーヒーをテーブルの隅に置くと、部屋の奥へと消えて行った。

あっちには給湯室があるのかもしれない。

しばらく窓辺に身体を寄せて外を眺めてたわたしは、戻ってきたシヤンさんに声をかけられてソファアに歩み寄った。

「ここに座れ。お前には資料を順番に揃えて整理する仕事をしてもらおう」

「はい」

20枚ほどの洋紙が1束になった資料が手渡された。

これを見本に揃えろということか。

テーブルの上には、シャンさんが探してきた分厚い本の山と隣り合わせて、A4サイズの洋紙の山がそびえていた。

「これ、全部？」

「当たり前だ」

あっさり言い返されて気が遠くなりそうになってるわたしを差し置いて、着ていたローブを脱いだシャンさんは、シャツの袖をまくり本を手にとってパラパラと凄い速さで読みはじめた。

その速読にも驚かされたけどそれ以上に、シャンさんの完成されたしなやかなプロポーションに目が釘付けにされた。

本を支える指や手首は、折れるんじゃないかってくらいにほっそりしてるのに。

胸の膨らみは窮屈そうにシャツを押し上げてる。

ぼ、ボタンが弾けそう

よくよく観てみると、シャツから透けて見える腕はただ細いだけじゃなくて、適度に引き締まってるようだ。

まるで無駄な贅肉がない身体は、有名な画家が描いた1つの作品のように思える。

おかしい！

そんなに歳は変わらないように見えるのに

この発育の差は絶対おかしい！

わたしのなんて一向に成長する気配すらないのに！

ずるいつー！

嫉妬混じりにシャンさんの身体をじとーっと眺めていたら、ふいにその華奢な肩が震えだした。

「くくつ。お前は考えてる事がなんでも顔に出るんだな」

「なっー！」

そう言われて顔を上げると、不自然に口角を上げたシャンさんの顔があった。

「ーもうつー！！笑ってるんですか？馬鹿にしてるんですか？どっち！？」

今考えてることがバレたなら惨め過ぎる。

いつそ思いつきり笑って馬鹿にすれば良いのに！と思って問うてみ

ると、シャンさんは眉を寄せてそつと自分の頬に触れた。

「 “笑った” つもりだったが あまりうまくいかなかったか
ポツリと呟かれた言葉の意味を考える前に、シャンさんの手が伸びてきて顔をガシツと捕まれた。」

「ふぎゅ!?!」

「 “笑み” を作るのには容易ではないな。 お前を観てると簡単にできそうなのに」

「は、はなっ」

顔の形が変わるっ!

結構な力で捕まれて頬っぺたが痛い。

シャンさんの腕をペシペシと叩いて、離してもらおうともがいた。

「ひゃんさん! いたひよ! いたひっ」!

本格的な痛みがやってきたわたしは、うっすら滲んできた涙で潤む視界でシャンさんを睨んだ。

わたしの視線を真正面に受け止めたシャンさんは、パチパチと瞬きを数回すると手の力を少しだけ緩める。

「 そうか、その表情は良いな。弄びたくなる。 だが “作る” のは難しそうだ」

「は?!意味わからないんですけど」

緩んだ手を押しつけて、痛くなつた頬つぺたをさすつた。

「表情つて感情によって変わるものだから、“作る”ものじゃないと思います」

「なら感情が乏しい者は表情がないということか」

「まあ、そういう事になる、かな？」

よくわからない話に進んでいってる気がする。

わたしの曖昧な返答に、シャンさんは納得したように頷いた。

「なるほどな。どおりで出来ないわけだ。私にはそもそも感情がないから。もう少し“表情”を作れと主に言われたが、不可能に近いな」

シャンさんは独り言のように語りだした。

感情が無い人間なんているのかな？

主ってルールシエルのことだよな。

ルールシエルがシャンさんに表情を作れって命令したの？

そんなこと言うとは思えないけど。

「シャンさん、表情は無理に作る必要はないんですよ？嬉しかったり楽しかったりしたら笑うし、悲しかったら泣きます。その時々で自然に変化するんですから」

「
」

ね？と伺うようにシャンさんを見れば、理解不能と言いたげな表情をした彼女がわたしを見つめ返した。

「ほら、今『意味不明』って思ってるでしょう？“表情”にでてますよ」

小さく笑みをこぼしたわたしが、シャンさんの瞳に映った。

出会って初めて、シャンさんのガラスのような瞳に、わたしという存在が映った瞬間だったと思う。

14 | 新たな一面(2) (後書き)

(3) | 続きます!

15 | 新たな一面(3)

シャンさんはもしかしたら不器用な人なのかもしれない。

わたしに蔑んだような視線を投げてるのには、深い理由があるのかもしれないと思った。

弾むような話題が2人にあるわけもなく、お互い自分の作業を無言で進めていた。

本のページをめくる掠れた音と、トントンと資料を揃える音だけがわたし達を包む。

どれくらい経ったか、与えられたノルマを半分ほど消化した頃、わたしのお腹が盛大に自己主張した。

「ぐうぐう」

お腹すいた

あれからどれくらいの時間、こうやって作業を続けてたんだろう。

シャンさんは資料に目を通しては、スラスラと洋紙に何かを書き留めていく、という動作を淀みなく繰り返している。

「休憩にするか」

わたしのお腹の悲鳴を聞いたシャンさんは、手を止めてフツと肩の力を抜いた。

「だいぶ進んだな」

「はい」

シヤスさんはわたしがまとめた資料をざっと確認し、冷たくなったコーヒーを飲み干した。

「あの、お昼はどこで？」

気になることを尋ねてみると、シャンさんは少し考えるようなそぶりを見せた後、無言で給湯室に消えていった。

あれ、行っちゃった？

どうしたものかと、足をぶらぶらさせて待っていると、数分も経たないうちにお皿を片手に持ったシャンさんが戻ってきた。

「食べる。昼食だ」

コトリと目の前に出されたお皿には、一口大のサンドウィッチが綺麗に並べられている。

「美味しそうっ！いただきますー！」

お腹が空いていたわたしは、サンドウィッチと一緒に出されたお手持きで簡単に手を拭き、1つつまんで口にほうり込んだ。

食べたことの無い具のサンドウィッチだけど、これはこれで美味しい。

わたしの向かい側に腰を下ろしたシャンさんは、パクパクとサンドウィッチを平らげていくわたしをジッと観察していた。

観られていて気分が良いものではないけど、シャンさんと付き合っていくなら仕方ない事なのかも知れない、と半ば諦めたわたしは気にせず口を動かした。

「旨かったか」

綺麗になったお皿に視線を向け、シャンさんは興味なさそうに呟いた。

「美味しかったです。ごちそうさまでした」

お腹が満たされて落ち着いたわたしは、シャンさんに向かって笑いかけた。

「そうか」

ほんの少しだけ表情が和らいで見たのは、わたしの気のせいかな？
シャンさんはわたしを見つめて、何を思ったかずいっと顔を近づけてきた。

「え　わあ!？」

犬や猫がするように、ペロツと唇の端を舐められて飛び上がる。

ざらりとしたなんとも言えない感触にゾワッと鳥肌が立った。

「ちよっ、ちよっと！いきなり何するんですか?!」

「特別旨い物でもないんだがな」

「はあ？」

「暫く休憩にする。好きにして良い」

舐められた口元を押さえてソファーから飛び降りたわたしに、一瞥をくれたシャンさんは、スタスタとお皿を持って行ってしまった。

「なに、一体」

これがスキンシップだと言うなら、こつちの世界の文化を本気で疑う。

それに好きにしてて良いって言われても困るよ。

ソファーに座り直して、軽いシヨックから立ち直ったわたしは、手持ち無沙汰になって室内をウロウロしていた。

シャンさんの気配が完全になくなって、彼女もどこかに行ったんだろうと思っただわたしは、そろっと部屋を出て辺りを見渡した。

この日は誰もここに来ていないらしく、シーンと静まり返っていた。

天井を仰ぎ見てみると、天窓から眩しい太陽の光が差し込んでいた。

「どつせなら最上階まで上ってみよー」

行くなって言われてないし平気だろう、と勝手に解釈して階段を上りはじめた。

その階毎に壁に飾られてる絵画が違って面白い。

まるで小さい美術館に来たみたいで。

わたしはキョロキョロ辺りを見ながら順調に上っていった。

他の部屋には入るなど言われていたから、さすがに言い付けを破ろうとは思わなかったけど、他はどんな部屋になってるのか気になった。

「はあゝ 着いた。 脚痛い」

一番上の階まで上りきったわたしは、痛む太ももを叩いて一息つく。

「あれ？」

最上階も他の階と同じ様に5つドアがあったけど、そのうちの1つのドアが少しだけ開いていた。

誰かいるのかな？

そっと近づいて聞き耳を立ててみる。

よくは聞き取れないけど女の人の声があった。

会話をしてるようだから2人はいるみたいだ。

言い争ってるような、和やかな雰囲気ではないような、そんな感じがする。

どう考えてもここに居ちゃいけないと思ったけど、わたしは好奇心に負けてほんの少しだけドアを押ししてしまった。

中から微かに漏れるソプラノな声に聞き覚えがあったものだから。

ルル？

ちよつと中を確認するだけ、とそんな軽い気持ちで覗いてみた。

ルールシエルが居たら声をかけようと思って。

だけどドアの隙間から見たその光景に、わたしは文字通り固まってしまった。

大きめのソファアーの上で重なる2人のシルエットが目に入り、全身から冷や汗が吹き出した。

『あつ まだ話がつ ん、』

『もついい』

『っ あつ！』

真っ赤なドレスを身に纏った女の人をソファアーに押し倒して、組み

伏せてるのは紛れも無くルールシエル、彼だ。

馬乗りになった彼はその人の首筋に顔を埋めていて、わたしからその表情は伺えない。

女の人が吐き出すなまめかしい吐息が嫌に耳についた。

組み伏せられた女の人の細い腕がルールシエルの首に回り、彼の手がドレスの裾をたくしあげた時、わたしの脚は反射的に動き出していた。

時間をかけて上ってきた階段を一気に駆け降り、さっきまで居た1階の一室に飛び込む。

後ろ手に閉めたドアが派手な音を立てたけど、気にしてる余裕なんて微塵も無い。

ドアに寄り掛かって乱れた呼吸を整えた。

今見た光景が目に焼き付いてしまっただけ消えてくれやしない。

ぎゅっと心臓を捕まれたような感じがする。

初めて実際に目の当たりにした、そういう場面に動揺を隠せず、じわじわと身体の血液が顔に集中していくようだ。

わたしは熱をもった頬を両手で包み、ズルズルとしゃがみ込んだ。

「あれ ルルだったよね」

信じたくない気持ち強い一方、ルールシエルを見間違えるはずがないという、確信に近いものを感じていた。

こっちの世界に来て、無条件で信頼を寄せていたルールシエルが、別人の様に見えたのを認めたくないのかもしれない。

いつも優しく大人なルールシエルが、力に任せて女の人を組み敷くなんて信じられない。

女の人も女の人で、本気で嫌がって拒絶してる様には見えなかったし。

やっぱり2人はそういう関係なのかな

あの後2人がどうなったかなんて、全く経験の無いわたしにだって想像はつく。

考えれば考えるほど、気分は悪くなってほてった頬から血の気が引いてくようだ。

「はぁぁぁー　なんか、なぁ　」

変なモヤモヤが心に居座るようで気持ち悪い。

「そんなところで何をしている」

膝に埋めていた顔を上げると、マグカップを2つ持ってソファアに座ろうとしているシャンさんが、わたしに怪訝な顔を向けていた。

ドアの前で膝を抱えて座り込んでいたわたしは、ノロノロと立ち上

がってシャンさんの隣まで歩いていく。

「なんでもない、です」

「顔色が冴えないな。 どうした」

説明する気にもなれず、脱力感にみまわれるわたしを見て、彼女は何か感づいたみたいだ。

「 21階に行ったのか? 」

21階と言う単語にピクリと反応してしまい、それに気づいたシャンさんはああ、と小さくため息をこぼす。

「 最上階は主の私室でもあると、言い忘れていた。 もっぱら女との逢い引きに使われている。 最近はあまり見なかったんだがな 」

「あ、アイビキ ですか」

ガンと頭を叩かれたような衝撃を受け、呆然とシャンさんを見つめると、彼女はなんてことも無いように言い放った。

「なんだ、知らなかったのか。 おまえも愛人のうちの一人になったんだろ? 」

あいじんのうちのひとり?

アイジンのうちの一人

愛人のうちの一人 ?

友達じゃなくて？

恋人、じゃなくて？

「愛人、だなんて わたしそんなつもりじゃない」

ルールシエルはわたしを愛人として側においてたの？

だからあんな風に接してたの？

やっぱり、ルールシエルにとってはなんて事の無いことだったんだ
だ 今までのすべてが。

「わたし いろいろ初めてだったのになあ」

思わず呟いた声は、消え入りそうなくらい小さいものだった。

わたしにとってルールシエルは特別だったんだと思う。

だけど彼にとってわたしは特別じゃなかった。

たったそれだけの事なのに、わたしの頭は真っ白になってしまった。

15 | 新たな一面(3) (後書き)

読んでいただきまして、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1338o/>

永久の契約

2011年2月22日08時30分発行